甲賀市文化財報告書　第15集

北脇遺跡第12次・下川原遺跡第10次
発掘調査報告書

２０１０

甲賀市教育委員会

序

市内水口地域は、近年の開発事業に伴う発掘調査により、大規模な遺跡が相次いで発見され、本書で取り上げる「下川原遺跡」・「北脇遺跡」もそのひとつです。

下川原遺跡第10次調査の調査区域は、「下川原遺跡」の東部に位置します。調査地では、古代の掘立柱建物や中世の掘立柱建物を確認したほか、古墳時代の竪穴住居も見つかりました。出土した遺物の中にも古墳時代の須恵器が一定量含まれ、隣接する泉古墳群との関連性が窺われます。

一方、北脇遺跡第12次調査の調査区域は、「北脇遺跡」のほぼ中央部に位置し、調査地では掘立柱塀や溝を検出したほか、平安時代の須恵器や緑釉陶器、灰釉陶器なども多く出土しました。緑釉陶器は春日地域の古窯跡で生産されたものとみられます。

本報告書の内容が当市の歴史を解明する一助となり、調査成果が市民の皆様をはじめ、広く活用されることを切に願っています。

最後になりましたが、本報告書で報告する調査の実施にご協力をいただきました積水化学工業株式会社のみなさま、辻運輸有限会社のみなさまに厚く御礼申し上げます。

平成22年（2010年）3月

甲賀市教育委員会教育長　國松　嘉仲

例　　言

1. 本書は甲賀市教育委員会が平成19～21年度に実施した北脇遺跡第12次発掘調査と平成20～21年に実施した下川原遺跡第10次発掘調査の調査報告書である。
2. 調査原因は以下の通りである。

北脇遺跡第12次発掘調査　　辻運輸有限会社による倉庫建設事業

下川原遺跡第10次発掘調査　　積水化学工業株式会社による駐車場など造成事業

3. 甲賀市教育委員会における調査体制は以下の通りである。

平成19年度　甲賀市教育委員会事務局
教育長　宮木道雄
歷史文化財課長　雲林院治夫
課長補佐　林口幸治
係長　鈴木良章（埋蔵文化財係）
技師　小谷徳彦（調査担当者）
技師　渡部圭一郎
主事　西野久俊

平成20年度　甲賀市教育委員会事務局
教育長　國松嘉仲
歷史文化財課長　雲林院治夫
課長補佐　林口幸治
係長　鈴木良章（埋蔵文化財係）
技師　小谷徳彦（調査担当者）
技師　渡部圭一郎
主事　西野久俊

平成21年度　甲賀市教育委員会事務局
教育長　國松嘉仲
歷史文化財課長　林口幸治
課長補佐　大﨑哲人
係長　鈴木良章（埋蔵文化財係）
主査　小谷徳彦（調査担当者）
技師　渡部圭一郎
主事　西野久俊

4. 現地調査および整理調査にあたり、下記の方々の協力を得た（敬称略・五十音順）。

（北脇遺跡第12次調査）　小川隆之　奥田彰　小田重年　佐藤美紀　杉本義弘　東郷力　東郷久代　服部あや子　服部撤三　平井正義　廣岡輝治　藤江正和　松井純子　横畠温仁　吉田献

（下川原遺跡第10次調査）　糸井達也　岡田里奈　小川隆之　奥田彰　佐藤美紀　杉本義弘　平井正義　廣岡輝治　松井純子　横畠温仁　藤江正和　吉田献　吉久義邦

5. 本書の執筆・編集は小谷徳彦が行った。
6. 発掘調査および報告書の作成にあたって、次の方々ならびに機関からご指導・ご助言をいただいた。記して厚く感謝の意を表す次第である（敬称略・順不同）。

畑中英二　細川修平　前岡孝彰　滋賀県文化財保護協会

8. 本書で使用した水準高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は世界測地系に準拠する。なお、本書で用いる北は座標北である。
9. 本書で報告した発掘調査で出土した遺物や掲載した図面・写真類は、甲賀市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章 周辺環境 …… 1
第２章 北脇遺跡第12次調査…… 6
第３章 下川原遺跡第10次調査…… 25

挿　　図

図１　甲賀市の位置
図２　北脇遺跡・下川原遺跡周辺の遺跡分布図
図３　北脇遺跡第12次調査　トレンチ位置図
図４　北脇遺跡第12次調査　土層図
図５　北脇遺跡第12次調査　遺構図
図６　SA0124　平面図・断面図
図７　SB0125　平面図・断面図
図８　SD0204・0206・0213・0214　平面図・断面図
図９　遺構内出土遺物
図10　包含層出土遺物
図11　その他の出土遺物
図12　下川原遺跡第10次調査　トレンチ位置図
図13　第１トレンチ　土層図
図14　第１トレンチ　遺構図
図15　SB0117　平面図・断面図
図16　SX0118　平面図・断面図
図17　SB0116　平面図・断面図
図18　SB0121　平面図・断面図
図19　第２トレンチ　土層図
図20　第２トレンチ　遺構図
図21　第１トレンチ　遺構内出土遺物
図22　第１トレンチ　包含層出土遺物
図23　SX0203出土遺物

図　　版

PL1	上段：第１トレンチＡ区
	下段：第１トレンチＢ区
PL2	上段：第１トレンチＣ区
	下段：第１トレンチＤ区
PL3	上段：ＳＡ０１２４
	下段：ＳＢ０１２５
PL4	上段：第２トレンチ全景
	下段：ＳＤ０２１３・０２１４
PL5	北脇遺跡第12次調査　出土遺物①
PL6	北脇遺跡第12次調査　出土遺物②
PL7	上段：下川原遺跡第10次調査　調査地全景
	下段：第１トレンチ全景
PL8	上段：第２トレンチ全景
	下段：ＳＢ０１１７
PL9	上段：ＳＸ０１１８
	下段：ＳＢ０１１６
PL10	上段：ＳＢ０１２１
	下段：ＳＸ０２０３（西から）
PL11	上段：ＳＸ０２０３（北から）
	下段：ＳＢ０１１７出土　土師器
PL12	下川原遺跡第10次調査　出土遺物

第１章　周辺環境

（1）地理的環境

甲賀市は滋賀県の南端に位置する。東西約43.8ｋｍ、南北約26.8ｋｍ、面積481.69ｋ㎡、県全体の約12％を占め、県内第２位の面積である。東を旧伊勢国である三重県鈴鹿市や亀山市、南を旧伊賀国である三重県伊賀市と旧山城国である京都府相楽郡、西を旧山城国である京都府綴喜郡と隣接し、三方を県境とする。北は大津市や湖南市、日野町などと接している。

市内の地形は、東に鈴鹿山系、南に信楽高原があり、この山々に挟まれた地域に古琵琶湖層郡の形成する標高200～300ｍの丘陵が広がっている。これらの丘陵は大きく３つに分かれ、北から水口丘陵、甲賀丘陵、甲南丘陵と呼ばれている。水口丘陵と甲賀丘陵の間には野洲川が、甲賀丘陵と甲南丘陵の間には杣川が流れており、ともに鈴鹿山系を源とする。丘陵の間を流れる２つの河川は長い年月の間にそれぞれ両岸に河岸段丘を形成し、その段丘上の平坦面に水田や畑が広がり、多くの人々の生活の場となっている。また、野洲川と杣川は市の中央北部にあたる水口町泉付近で合流し、琵琶湖に向かって西流する。この合流付近には沖積低地が広がり、周辺の低位段丘面と合わせて、南北約３ｋｍ、東西約５ｋｍの水口盆地を形成し、市内最大の平野部となっている。本報告書で取り上げる下川原遺跡と北脇遺跡もこの盆地内に位置する。

水口盆地は古くから交通の要衝となってきた。平安時代以降、東海道が東西に走り、野洲川には横田の渡しが存在した。また、野洲川と杣川を利用した水運も数多く利用され、甲南町の矢川津から石山寺改修用の建築部材を運んだことが記録に残っている。現在は旧東海道と並行するように国道１号線が通り、それと直交するように国道307号線が通過している。鉄道ではＪＲ草津線が東西に貫き、貴生川駅を起点として信楽高原鉄道と近江鉄道がそれぞれ南北に延びている。

下川原遺跡　甲賀市水口町泉に所在し、甲賀市の中央北部、水口盆地の西端に位置する。野洲川を挟んだ西側は湖南市になる。

図１　甲賀市の位置

遺跡は野洲川北岸の低位２次段丘面上に立地し、国道１号線の北側に広がっている。遺跡の北側は水口丘陵となり、非常に安定した地勢である。野洲川と杣川の合流点に近く、すぐ近くには横田の渡し跡がある。西から水口盆地へ入る玄関口に位置している。

北脇遺跡　甲賀市水口町北脇に所在。下川原遺跡の東約1.5ｋｍ、水口盆地の中央部北端に位置する。下川原遺跡と同じく、野洲川北岸の低位２次段丘面上に立地し、国道１号線の北側に隣接する。遺跡は水口盆地が最も南北に広がる地域にあり、北側は水口丘陵に接している。遺跡の南側に平野部が大きく広がっている。

（2）歴史的環境

水口盆地は上述したように、甲賀地域の交通の要衝として発展してきた。下川原遺跡と北脇遺跡も国道１号線に隣接し、旧東海道からも近い距離に立地している。また、河岸段丘の一番奥ではあるが、野洲川にも近い。道や河川を意識した立地であることは容易に想定できる。そして、両遺跡だけでなく、周辺の遺跡も地理的条件を反映して野洲川と杣川の両岸に密集している。

水口地域においては、近年まで埋蔵文化財の発掘調査がほとんど実施されておらず、古墳、城跡、窯跡など地表面から確認できるものが主体であった。しかし、近年、新名神高速道路の開通や国道１号線の拡幅工事に伴って、水口地域、特に水口盆地での開発が増加した結果、発掘調査の件数が増え、徐々に古代から近世の歴史が明らかになりつつある。

水口盆地で遺跡が確認できるのは、古墳時代に入ってからである。現在のところ、旧石器・縄文・弥生時代の遺跡は発見されていない。今後の発見に期待したところである。

古墳時代の遺跡は泉古墳群、植遺跡、泉窯跡など他、多くの後期古墳がある。

泉古墳群は水口丘陵の西端部に位置する。現在の積水化学工業の工場敷地内に西罐子塚古墳と東罐子塚古墳の２基が現存し、滋賀県指定史跡となっているが、他に３基の小円墳があったと言われている。

西罐子塚古墳は、水口丘陵の小さな尾根の先端部を利用して築造された直径50ｍ、高さ5.2ｍの円墳で、２段築成の円丘部に幅20ｍ、長さ10ｍ、高さ2.5ｍの造り出しが付属する。発掘調査は行われていないが、墳丘の斜面には川原石を用いた葺石を施し、墳頂部や段築のテラスには埴輪を樹立した可能性が高い。墳丘の中心部には大きな盗掘坑があり、木棺直葬と推測されている。採集された埴輪から５世紀前半頃の築造と考えられている。

東罐子塚古墳は、西罐子塚古墳の東約100ｍに尾根の先端を利用して築かれた円墳である。直径42ｍ、高さ5.5ｍ。墳丘頂部に盗掘坑があり、西罐子塚古墳と同じく木棺直葬と考えられている。現状では、埴輪や葺石は確認されていない。

５世紀中頃になると、東罐子塚古墳の東約500ｍの平野部に塚越古墳が築造される。昭和36年に土取りのために削られ、その際に内行花文鏡・碧玉製勾玉・四方白金銅装眉庇付冑・三角板皮綴短甲・三角板鋲留短甲・頸甲・鉄刀および鉄剣・鉄鏃が出土し、古墳時代中期の典型的な副葬品の組み合わせであることが判明している。また、平成13年には国道１号線の拡幅工事に伴っ

て発掘調査が実施され、一辺52ｍの方墳で、南辺を除く３方向に周濠を巡らせていることがわかった。墳丘の高さは周濠の底から6.5ｍである。２段築成の墳丘斜面には葺石を施し、墳頂部には埴輪を巡らせていた。埴輪には家形や盾形などの形象埴輪も含まれていた。

これらの古墳が築造された時期に大規模な集落遺跡も現れる。植遺跡である。平成13～14年にかけて発掘調査が行われ、竪穴住居119棟、掘立柱建物17棟、甕棺墓４基などが検出された。掘立柱建物の中には５世紀中頃の大型倉庫建物が３棟含まれ、その大きさは全国的に見ても巨大である。ヤマト王権との深い関わりを窺わせる。また、５世紀後半になると、大型倉庫建物は廃絶するが、鍛冶関係の遺物が確認できるようになる。手工業生産を行っていたとみられる。須恵器を生産していた泉窯跡と関連性も注目される。

植遺跡では６世紀以降も活発に竪穴住居が営まれているが、６世紀中頃から後半にかけて大きな変化を迎える。大型住居建物や棟持柱をもつ高床建物などが現れ、柵で区画された祭祀空間も形成されて、豪族居館の様相を備えることがわかっている。

泉窯跡は発掘調査が行われていないが、出土した須恵器の分析から５世紀末～６世紀初頭にかけて操業し、陶邑古窯跡群から工人が移動してきたことが推測されている。泉窯跡で生産された須恵器は植遺跡や近隣の集落や古墳などに供給されていたと考えられる。

また、６世紀に入ると杣川南岸の丘陵に横穴式石室をもつ古墳が数多く造られるようになる。園養山古墳群、岩坂古墳群、岩坂南古墳群、百合野古墳群、高山古墳群などである。これらの古墳群を総称して「甲賀群集墳」と呼んでいる。甲賀群集墳は現状で286基の古墳が確認されているが、400基近い数になると考えられており、６世紀前半から７世紀中頃にかけて造られている。一部に渡来系氏族との関係が考えられるものも含まれている。また、植遺跡との関係性も指摘されている。

７世紀になると、植遺跡が衰退して甲賀群集墳の造営も終了する。水口盆地における古墳時代の終焉と言える。７世紀前半には植遺跡の北西1.3ｋｍに下川原遺跡が出現し、７世紀前半から８世紀にかけての集落が営まれた。過去の発掘調査では50棟以上の竪穴住居や数棟の掘立柱建物が確認された。また、13世紀代の遺構も検出されており、中世の集落の存在も窺わせる。

下川原遺跡の東側には北泉遺跡が隣接している。詳細な調査は実施されていないが、甲賀市教育委員会が行った試掘調査では８世紀中頃～後半の須恵器などが出土し、竪穴住居と考えられる遺構も検出されている。

９世紀～10世紀には北泉遺跡の東側に北脇遺跡が出現する。北脇遺跡第４次調査では鉄製品の工房跡と考えられる掘立柱建物などが検出された。第５次・第７次調査では10世紀中頃の近江産の緑釉陶器が数多く出土した。また、第５次調査で青銅製の印鑑も出土している。北脇遺跡の性格についてはまだ不明な点も多いが、これまでの調査で確認された遺構や遺物の状況から一般的な集落遺跡とは異なる性格を持っていることが想定される。

11世紀以降の水口地域の遺跡の状況は、今の段階では発掘調査の件数が少ないため、十分に把握できているとは言えないが、中世になると、「柏木郷」という名が文献資料の中に現れる。水

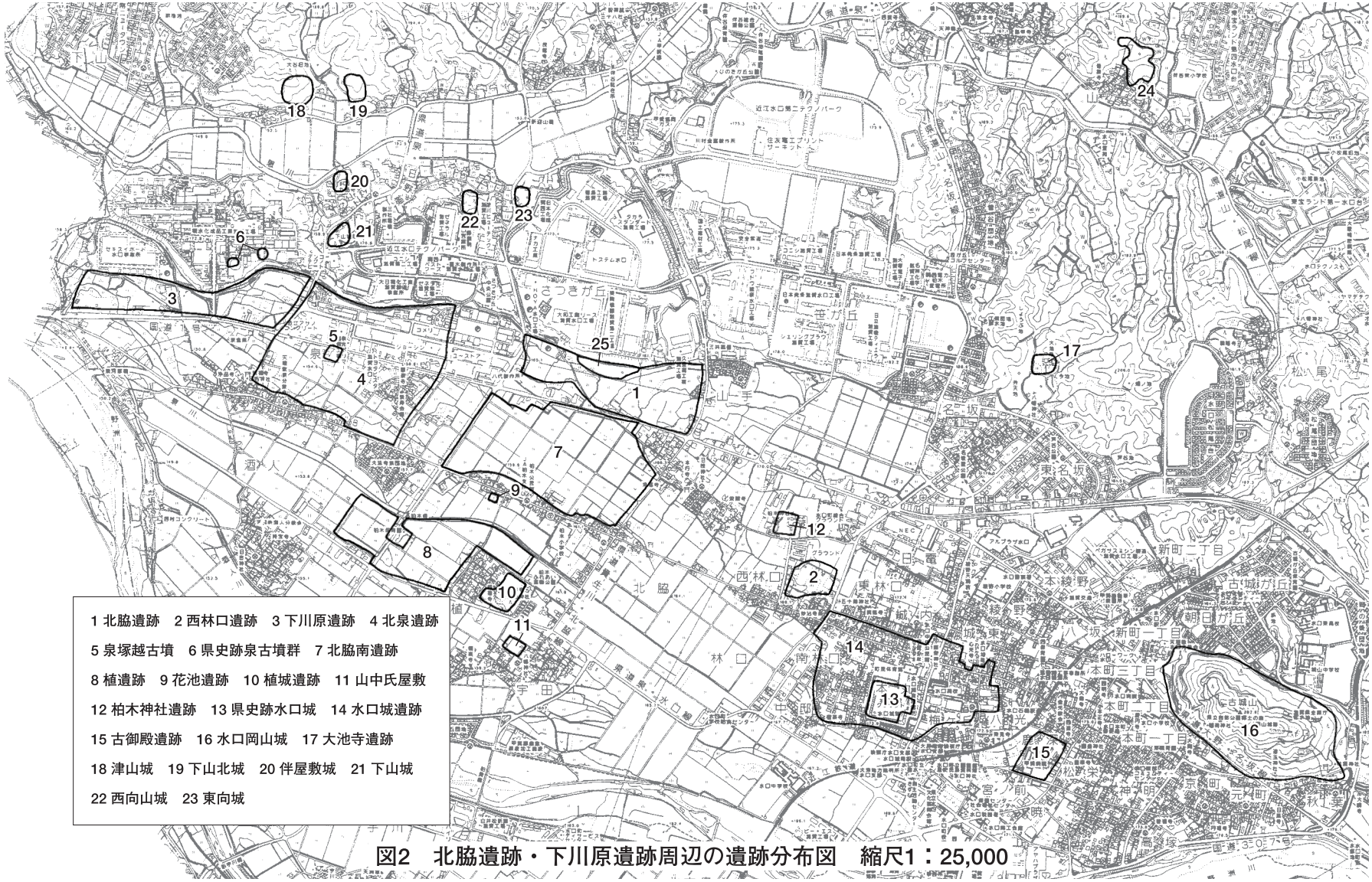


図2　北脇遺跡・下川原遺跡周辺の遺跡分布図　縮尺1：25,000

口町柏木周辺がその地に当たると考えられている。嘉承元年（1106年）9月25日に刑部丞源義光（新羅三郎義光）が柏木郷と山村郷の私領を摂関家と園城寺金光院に寄進したとされる（『園城寺伝記』・『平安遺文』40・41）。

長寛3年（1165年）には「柏木御厨」が伊勢外宮領として置かれ、文治3年（1187年）に宣旨されているが、その後、嘉禄2年（1226年）に山中中丞俊信が鈴鹿山賊を討伐した功績により柏木荘を領し、宇田に居住したとある。これ以降、山中氏がこの地に居住したようである。「柏木御厨」の正確な位置については不明であるが、山中家文書には15世紀の中頃まで「御厨」関連の史料があること、御厨保司職を代々、山中氏が受け継ぐことになっていること、山中氏の居館が宇田山中と言われていたことなどから、現在の柏木神社から宇田集落一帯が「柏木御厨」であったと推測されている。

山中氏は天正13年（1585年）に豊臣秀吉の命により元の領地である山中村（現在の甲賀市土山町山中）に戻されるが、植城遺跡では16世紀代の堀などが確認されており、天正13年までの山中氏の屋敷地と推定されている。

このように、古墳時代から中世にかけて水口盆地の東半地域が重要な位置を占め、人々の活動の中心であったことがわかる。しかし、天正13年に豊臣秀吉が家臣の中村一氏に命じて水口岡山城が築城させると、中心は水口盆地の西半地域に移ることになった。関ヶ原の戦い後、幕府の直轄領となり、3代将軍徳川義光の時に上洛の際の宿館として水口城を築かれ、東海道の宿場町としてさらに繁栄することとなった。

第２章　北脇遺跡第12次調査

1．調査概要

（1）調査経緯

辻運輸有限会社の倉庫建設に伴い、平成19年６月８日に甲賀市教育委員会で試掘調査を実施したところ、遺跡の存在を確認した。その後、両者の間で協議を行った結果、本発掘調査を実施することとなった。

当初、市教育委員会を調査主体として平成20年２月より構造物によって地下遺構に影響を及ぼす範囲300㎡を調査対象範囲として発掘調査に着手した（第１トレンチ）が、現地調査終了後に建築物の設計が変更になったため、当初は調査範囲から除外していた部分（第２トレンチ）についても地下遺構に影響を及ぼすことが判明し、平成20年９月より現地調査を再開した。最終的な調査面積は700㎡となった。

（2）調査経過

現地調査

日付	１トレ	２トレ	備考
H20.2.14	準備		
H20.2.15	重機掘削（同日終了）		
H20.2.19	排水溝掘削・壁面成形 （～2/20）		
H20.2.26	SD0101・0102		
H20.3.4	SD0103・0104・0105		
H20.3.6	SD0106・0107・0108 包含層掘削		
H20.3.7	SD0109 C・D区　包含層掘削 （～3/17）		
H20.3.11	SD0110・SX0111		
H20.3.13	SX0112・SP0113・ 0114・SD0115		
H20.3.18	SD0116・SX0117・ SD0118・0119 A・B区　写真撮影		
H20.3.25	SD0120・0121・ SP0122・0123 D区　写真撮影		

H20.3.26	C区　写真撮影 ピット断ち割り 実測開始		
H20.3.31	実測終了 現場撤収作業		
H20.9.1	埋め戻し		
H20.9.2		重機掘削開始（～9/8）	
H20.9.9		排水溝掘削・壁面成形 （～9/10）	
H20.9.12		SD0201・0202・0203	
			9/13～9/21　台風などによる 悪天候で現場できず
H20.9.22		基準点測量	
H20.9.24		包含層掘削（～10/4）	
H20.9.25		重機での包含層掘削	
H20.10.7		SD0204・0205・0206・ 0207・0208 SX0209・0210　SP0211	
H20.10.9		南半遺構検出（包含層 掘削後）	
H20.10.10		SD0212	
H20.10.16		SD0213・0214　SX0215 SP0216　SX0217 SP0218	
H20.10.17		写真撮影準備	
H20.10.18		写真撮影	
H20.10.22		実測（～10/28）	
H20.10.29		現場撤収作業	
H20.10.31		道具整備・後片づけ （～11/4）	

整理調査　平成20年4月から第1トレンチの調査分について開始したが、設計変更の協議により一時中断し、第2トレンチ調査終了後に再開した。中断期間や第2トレンチの現地調査を挟んだため、平成20年度と平成21年度の2ヶ年に渡って整理調査を実施し、平成21年度に本報告書の編集および刊行作業を行った。

2. 遺　　跡

(1) 調査地周辺地形

調査地は水口盆地中央部の北端に位置し、北側を水口丘陵に接している。南側には国道１号線が通っている。調査地周辺は北から南に向かって緩やかに傾斜しており、地形に合わせて水田が段々になっている。北側の丘陵裾は現在、竹藪になっているが、北脇城遺跡と呼ばれ、土塁の痕跡などが竹藪の中に確認できる。

なお、本調査地のすぐ西側を北脇遺跡第５次調査、すぐ南側を北脇遺跡第７次調査で発掘調査を実施している。また、第５次調査の西側は北脇遺跡第４次調査として（財）滋賀県文化財保護協会が発掘調査を行っている。

(2) 基本層序（図４）

上から①耕作土、②床土、③灰色粘質土（包含層）、④黄灰色粘質土（遺構検出面）、⑤礫混じり黄灰色粘土（地山）である。

遺構は④層の上面ですべて検出しており、遺構面は１層のみであった。また、③層の包含層は調査区の南半分で確認でき、北半分は②層直下で④層が露出した。旧地形を反映したもので、水田開墾時に北側を削平して南側に盛土したと考えられる。

(3) 遺　　構

本調査では、掘立柱塀１条、掘立柱建物１棟、土坑８基、溝15条（うち10条が水田暗渠）、その他ピットなど32基を検出した。以下、主要遺構について記載する。なお、調査の経緯の関係で第１トレンチと第２トレンチに分けて調査を行ったが、両トレンチは一体のものとなるため、トレンチごとに分けた記述はしない。

SA0124　調査区の北東部で検出した東西方向の掘立柱塀。検出したのは３間分であるが、東側は調査区外にさらに延びると考えられる。西側は遺構の残存状況が良くないため、すでに削平されてしまったと推察される。柱間は11尺等間である。柱掘形は一辺約60㎝の隅丸方形で、残存する深さが20㎝前後である。柱痕跡の直径は15～20㎝。方位は北で東に23℃振る。柱掘形および柱痕跡から遺物は出土しなかった。

SB0125　調査区の中央東端部で検出した掘立柱建物。検出したのは建物の南西角部分の２間分で、調査区の北側および東側へさらに延びると考えられる。柱間は７尺等間である。不成形な円形を呈した掘形で、直径60～70㎝。残存する深さは15～20㎝である。主軸の方位は北で東に33℃振る。土師皿と推測される細片が１点出土した。

SD0204　調査区の中央東側で検出した幅90㎝前後の東西方向の素掘溝。検出した長さは約12ｍ。残存する深さは５㎝と非常に浅い。主軸の方位は北で西に15℃振るが、調査区の東端で屈曲し、ほぼ東西に方位を揃えて東に延びる。10世紀中頃の緑釉陶器が出土した。

SD0206　調査区中央で検出した幅50㎝前後の東西方向の素掘溝。検出した長さは約15ｍ。残存する深さは最も深い部分で15㎝である。主軸の方向は北で東に15℃振る。溝の東端で南に屈曲している。須恵器杯Ｂ蓋や緑釉陶器椀などが出土した。

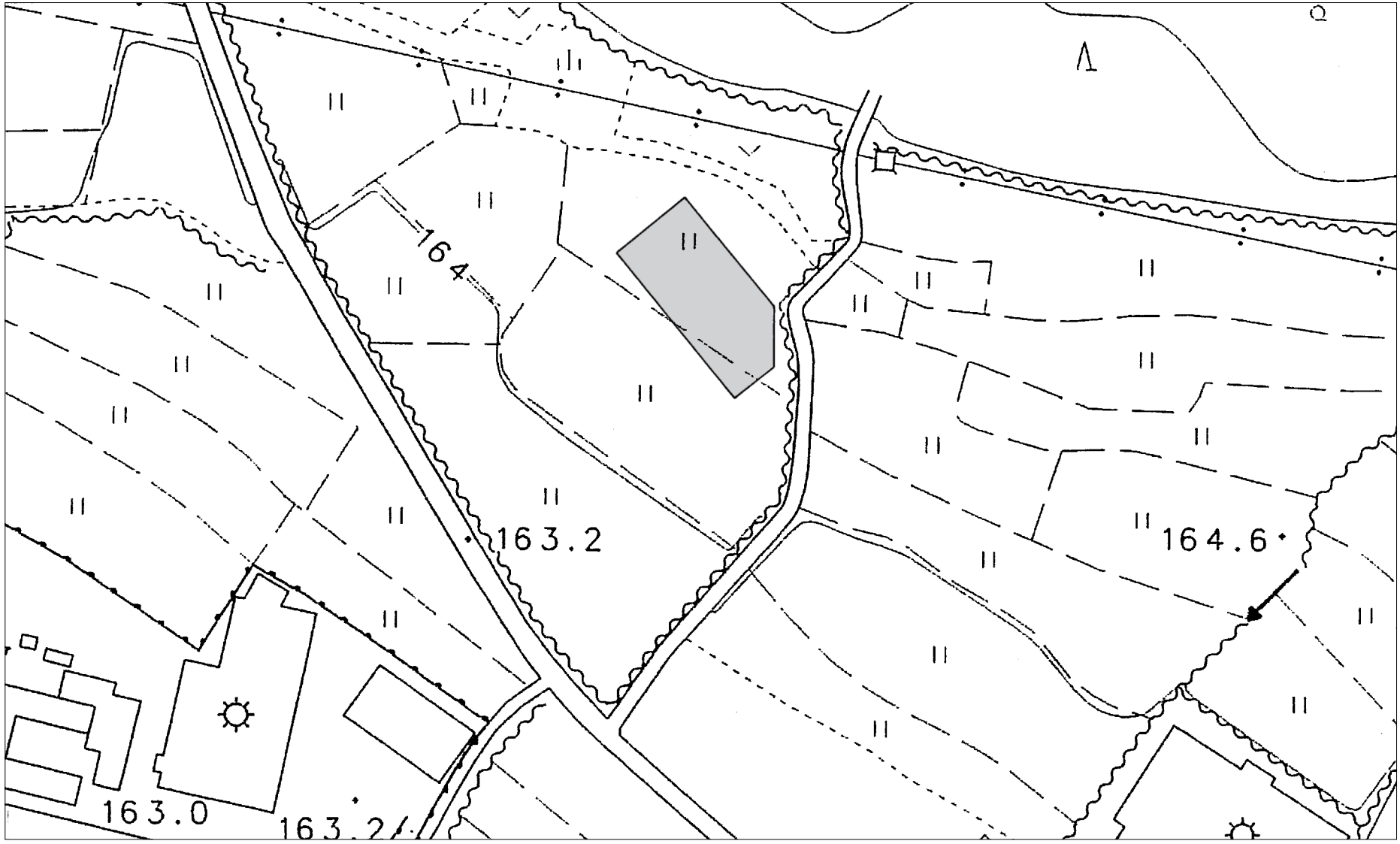
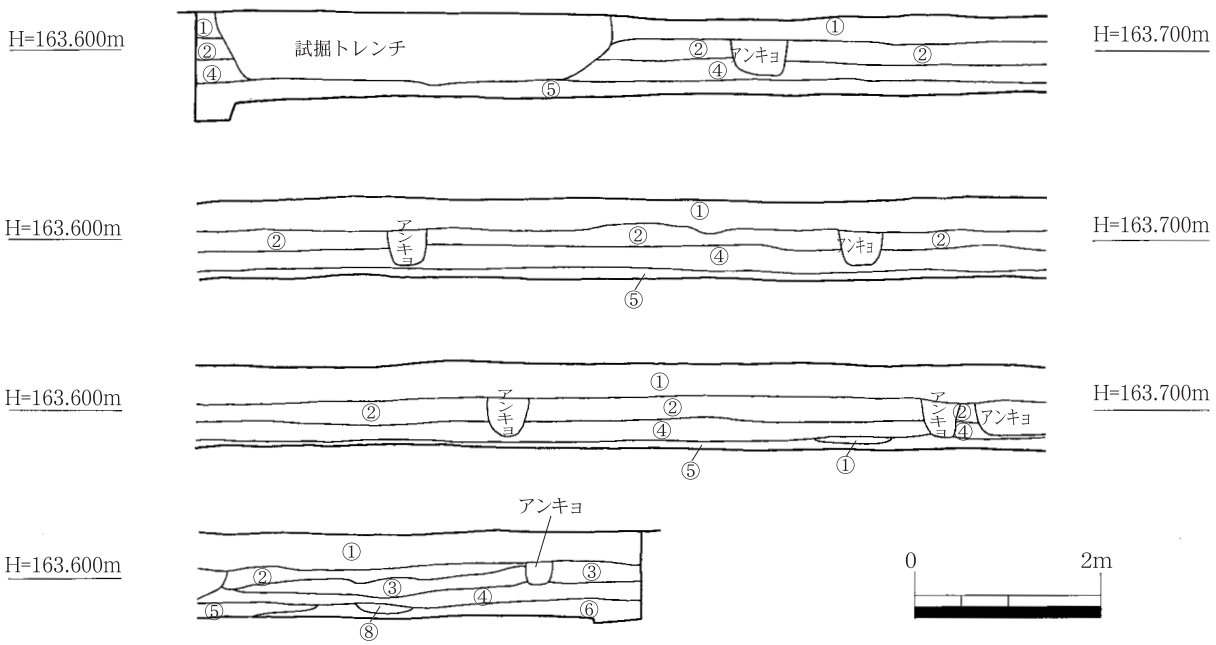
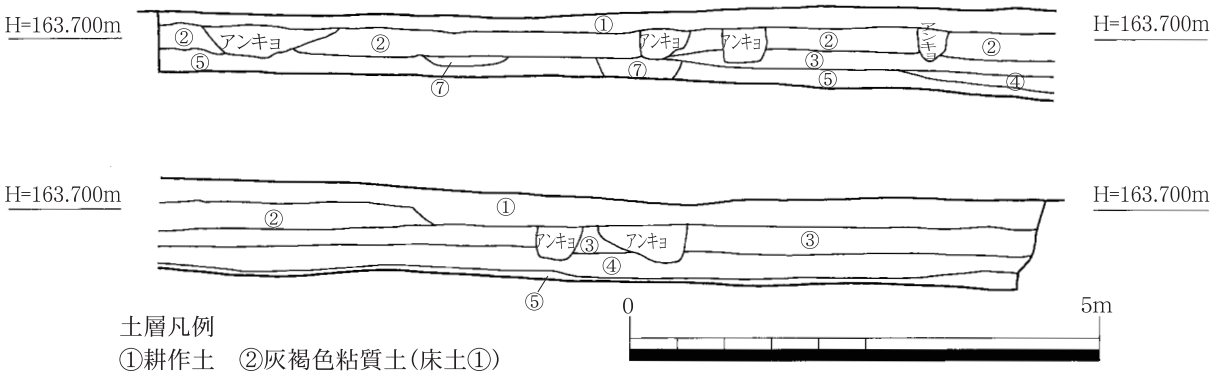


図3　北脇遺跡第12次調査　トレンチ位置図　1：1000



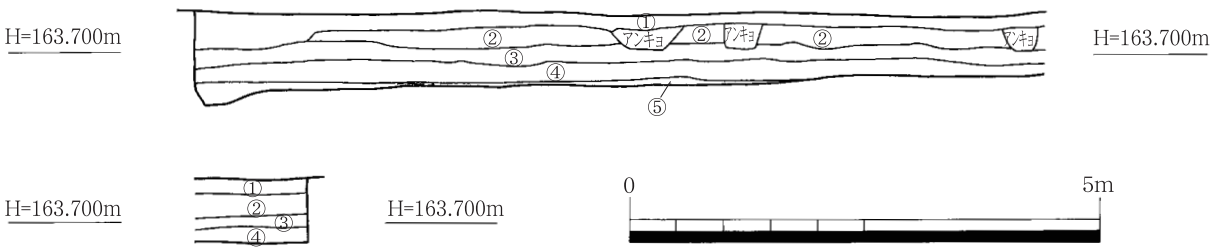
土層凡例
①耕作土　②灰褐色粘質土(床土①)　③暗灰褐色粘質土(床土②)　④灰色粘質土(包含層)
⑤黄灰色粘質土(遺構面)　⑥灰色砂礫　⑦淡灰色粘質土　⑧暗灰色粘質土

南壁土層図



土層凡例
①耕作土　②灰褐色粘質土(床土①)
③暗灰褐色粘質土(床土②)　④灰色粘質土(包含層)
⑤黄灰色粘質土(遺構面)　⑥炭混じり黄灰褐色砂質土　⑦黄灰褐色粘質土

東壁土層図



土層凡例
①耕作土　②灰褐色粘質土(床土①)　③暗灰褐色粘質土(床土②)　④灰色粘質土(包含層)
⑤淡青灰色砂礫(地山)

西壁土層図

図4　北脇遺跡第12次調査　土層図　1：80

SD0213　調査区の中央東側で検出した幅50～60㎝の東西方向の素掘溝。検出した長さは約8m。残存する深さは最大で10㎝。調査区の東端では浅くなり、確認できなくなる。溝の西端は調査区中央部でSD0214と合流する。主軸の方位は北で東に25℃振る。須恵器杯A・B、灰釉陶器椀、緑釉陶器素地などが出土した。

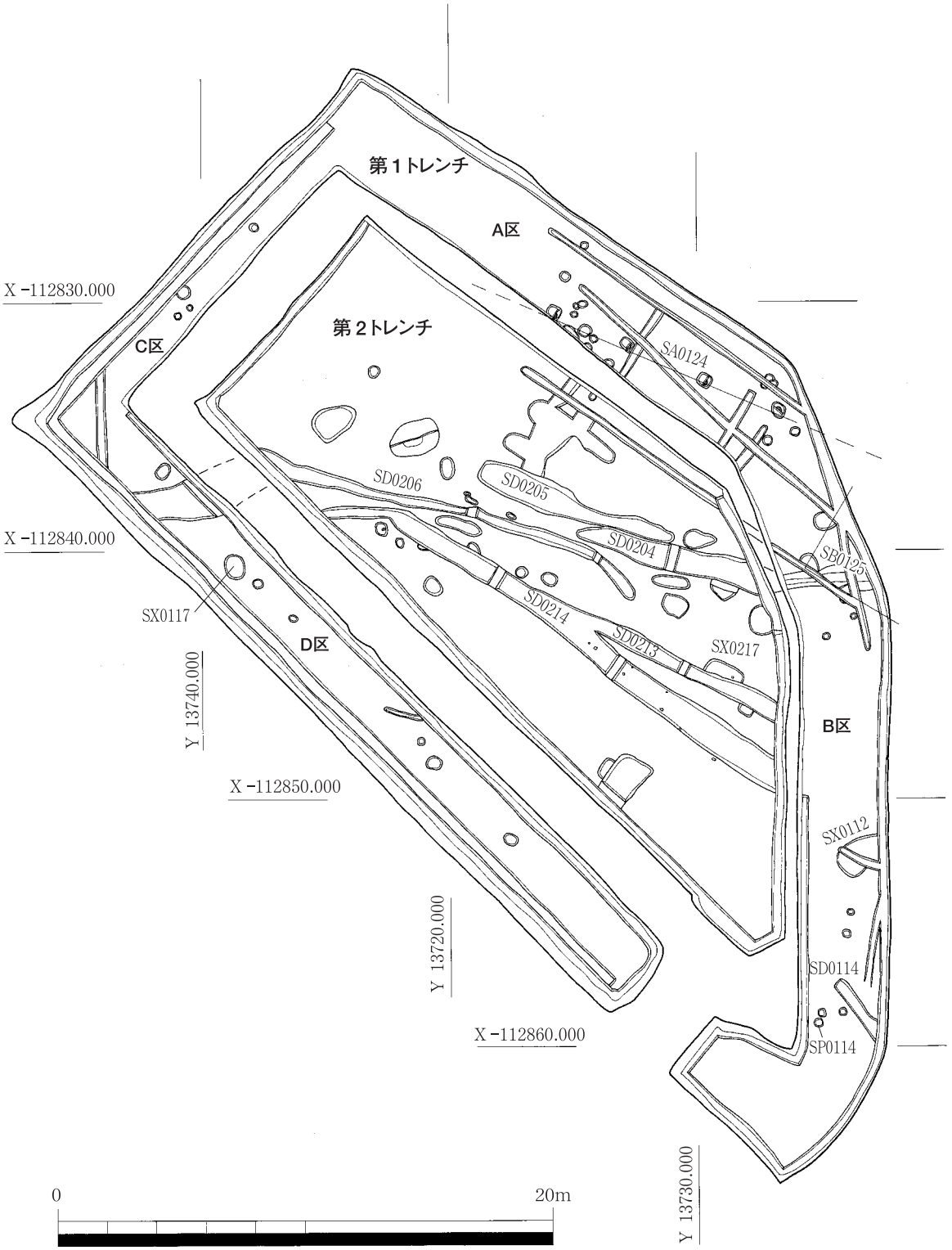


図5　北脇遺跡第12次　遺構図　1：400

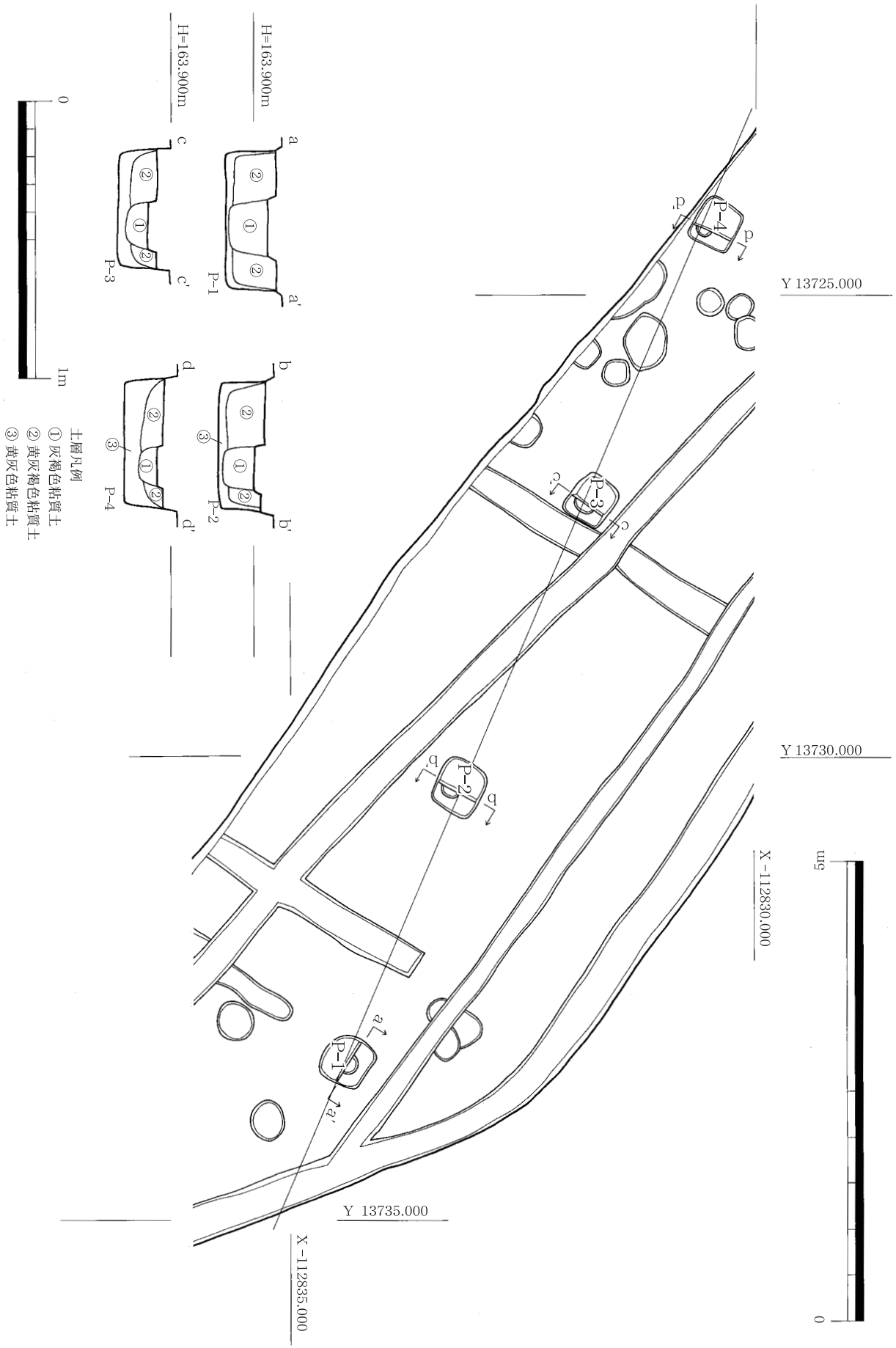


図6　SA0124　遺構図 1：60　断面図 1：20

SD0214　調査区中央部から南半にかけて検出した東西方向の素掘溝。検出した長さは約25ｍ。残存する深さは最大で約10㎝。調査区の東端ではSD0213と同じように浅くなって確認できなく

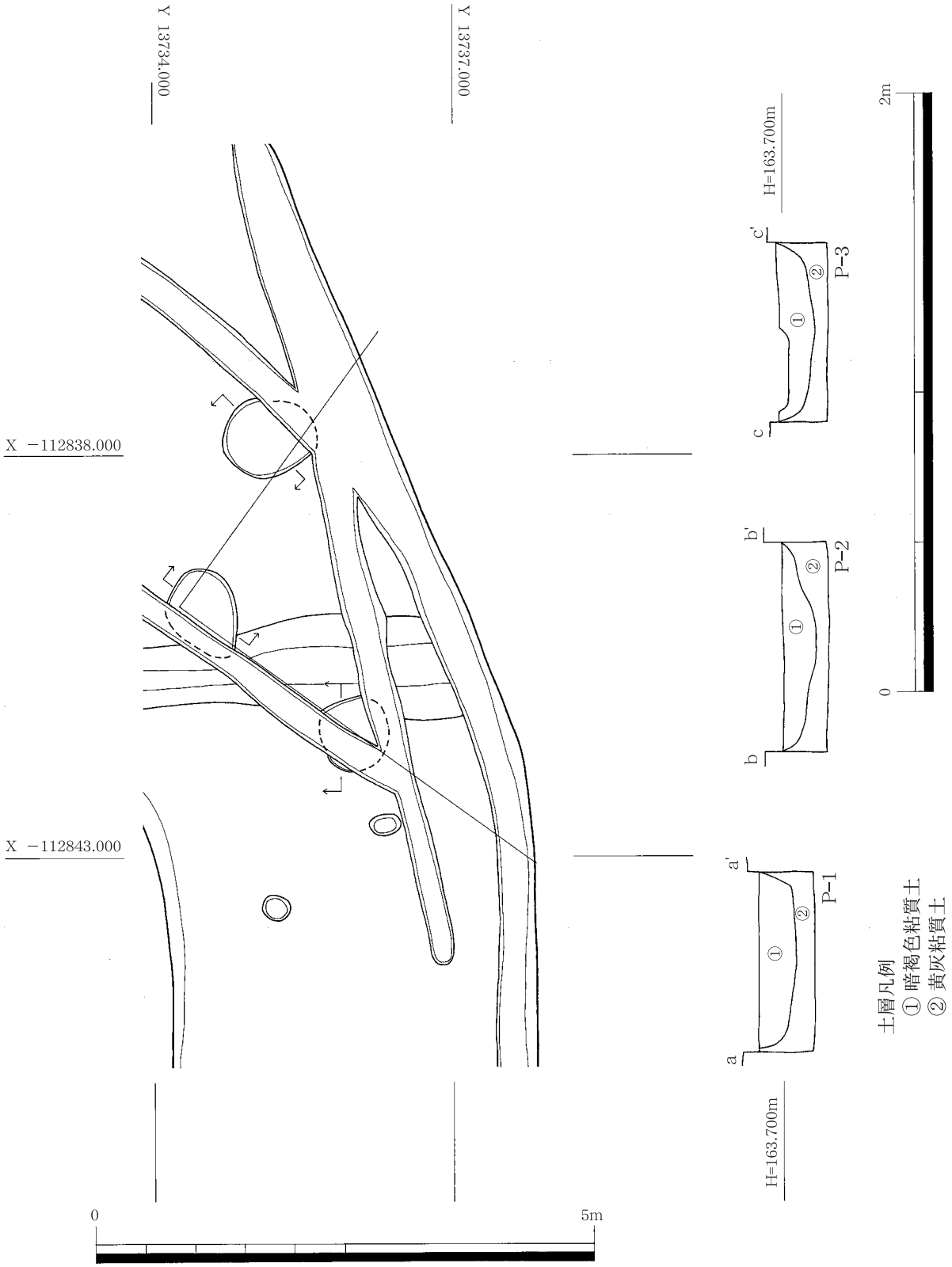


図7　SB0125　遺構図１：60　断面図１：20

なる。主軸の方位は北で東に35℃振るが、溝の西端部で屈曲し、方位を東西に揃えて西に延びる。土師器、須恵器、緑釉陶器が出土している。中央付近でSD0213と合流するが、後述するように主軸の方位による遺構のグルーピングから考えて、SD0213からSD0214へと付け替えられたと推定される。

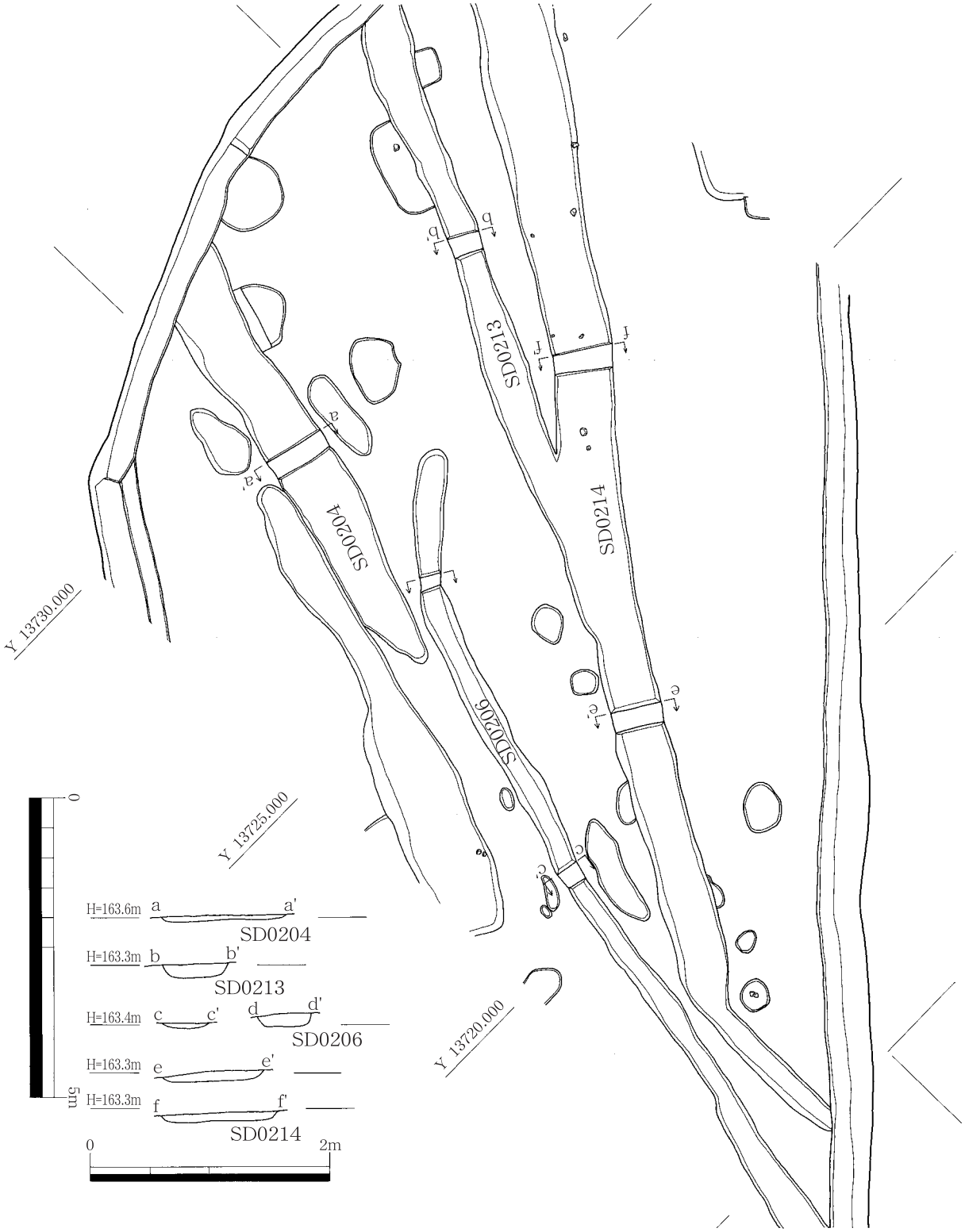


図8　SD00204・0206・0213・0214　遺構図1：100　断面図1：50

SX0217　調査区中央東側で検出した方形の土坑。1.5ｍ×1.0ｍの長方形を呈す。南半分をSD0213によって切られる。残存する深さは5㎝と浅い。須恵器の杯が出土した。

SX0117　調査区中央南端部で検出した円形の土坑。直径約1ｍ、深さ約10㎝。13世紀前半代の瓦器椀が出土した。

SX0112　調査区東端で検出した不整形な土坑。2.0ｍ×1.5ｍの楕円形に近い形になる。深さは最大で10㎝。石英の塊が出土した。

SP0114　調査区南東端で検出したピット。直径約30㎝。組み合うピットが確認できず、建物や塀を形成するピットでない。深さ約5㎝。土師器の小型壺が出土した。

3. 遺　　物

（1）遺構内出土遺物（図9）

各遺構から遺物が出土したが、細片が多く、図化できるものは少なかった。以下、図化したものについて詳細を記す。

1は土坑SX0117出土の瓦器椀である。口径14.0㎝、残存する高さ2.7㎝。底部から斜めに立ち上がる体部は底部と口縁部の中間あたりで屈曲し、腰の張った形態をなす。器壁は厚さが5mmを越える箇所があり、全体的に分厚い。口縁端部の内側には沈線がめぐる。表面の黒色層は摩滅して残っていないが、内面にはヘラミガキが施された痕跡がわずかに確認できる。胎土は精良。焼成はやや軟質で黄灰白色を呈す。器形の特徴からいわゆる近江型の瓦器椀に属し、13世紀前半の製品と考えられる。

2・3はSD0206出土の土器である。2は須恵器杯Ｂ蓋で口径12.0㎝、器高1.3㎝を測る。平らな天井部は中位で屈曲し、斜めに口縁部へ向かい、口縁部で強く折り込まれて端部を形成する。中心部が残っていないので、つまみの有無は不明。天井部はヘラケズリで調整されている。口縁部から内面にかけてはナデ調整である。胎土は精良。焼成は硬質で灰色ないし淡青灰色を呈す。9世紀前半の製品。

3は緑釉陶器の椀。口径18.0㎝、残存する高さは5.7㎝である。底部から屈曲した体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を外反させる。腰の張りは弱く、口縁端部の外反度も小さい。内外面ともにミガキ調整で仕上げられ、釉薬が施されている。1次焼成は須恵質に焼き上げられている。底部が残っていないので、高台の形態は分からないが、近江型の緑釉陶器に属すと考えられる。10世紀中頃の製品。

4はSX0217出土の須恵器杯。口径16.0㎝、残存高3.0㎝。体部は口縁部に向かって斜めに真っ直ぐ立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反する特徴をもつ。調整は内外面ともにナデ調整。胎土には細かな長石粒を多く含む。焼成は硬質で青灰色を呈す。9世紀。

5～9はSD0213出土の土器。5は須恵器杯Ｂである。口縁部まで残っていないので、口径は不明。高台径は9.1㎝、残存高は2.3㎝。底部と体部の境は強く屈曲し、底部から屈曲した体部はわずかに内湾しながら口縁部に向かう。高台は外に踏ん張る断面方形だが、底がわずかにくぼむ。

高台の取り付け位置は底部と体部の境よりわずかに内側になる。底部外面はヘラケズリで仕上げられ、それ以外はナデ調整が施されている。胎土は精良。焼成は硬質で淡青灰色を呈す。9世紀初頭のものと考えられる。

6と7は高台のない須恵器杯Ａである。口径は不明だが、底部の直径は8.0㎝の小型品（6）と底部の直径が13.3㎝の大型品（7）がある。残存する高さはともに約2.0㎝。底部は直線的である。底部と体部の境は強く屈曲し、体部は斜め上方へまっすぐと立ち上がる。底部はヘラケズリ調整だが、不徹底で回転台から切り離した時のヘラ切りの痕跡が残っている。体部内外面と底部内面はナデ調整である。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。9世紀前半の製品である。

8は灰釉陶器の椀。高台の直径は5.6㎝、残存する高さは2.0㎝。直線的な底部から内湾する体部が立ち上がる。底部と体部の境に貼り付けられた高台は細長く、外反気味に外へ踏ん張る特徴をもつ。調整は内外面ともにナデ調整である。内面にわずかに釉薬が確認でき、体部上半部にも釉薬が確認できる。体部下半と底部外面には施釉されていない。高台の特徴などから猿投窯における東山72号窯式に相当すると考えられ、10世紀前半の製品と推測される。

9は緑釉陶器の須恵質の素地である。器種は椀。高台の直径は9.2㎝、残存する高さは2.2㎝。直線的な底部から内湾する体部が立ち上がる。高台は有段輪高台で底部と体部の境に貼り付けら

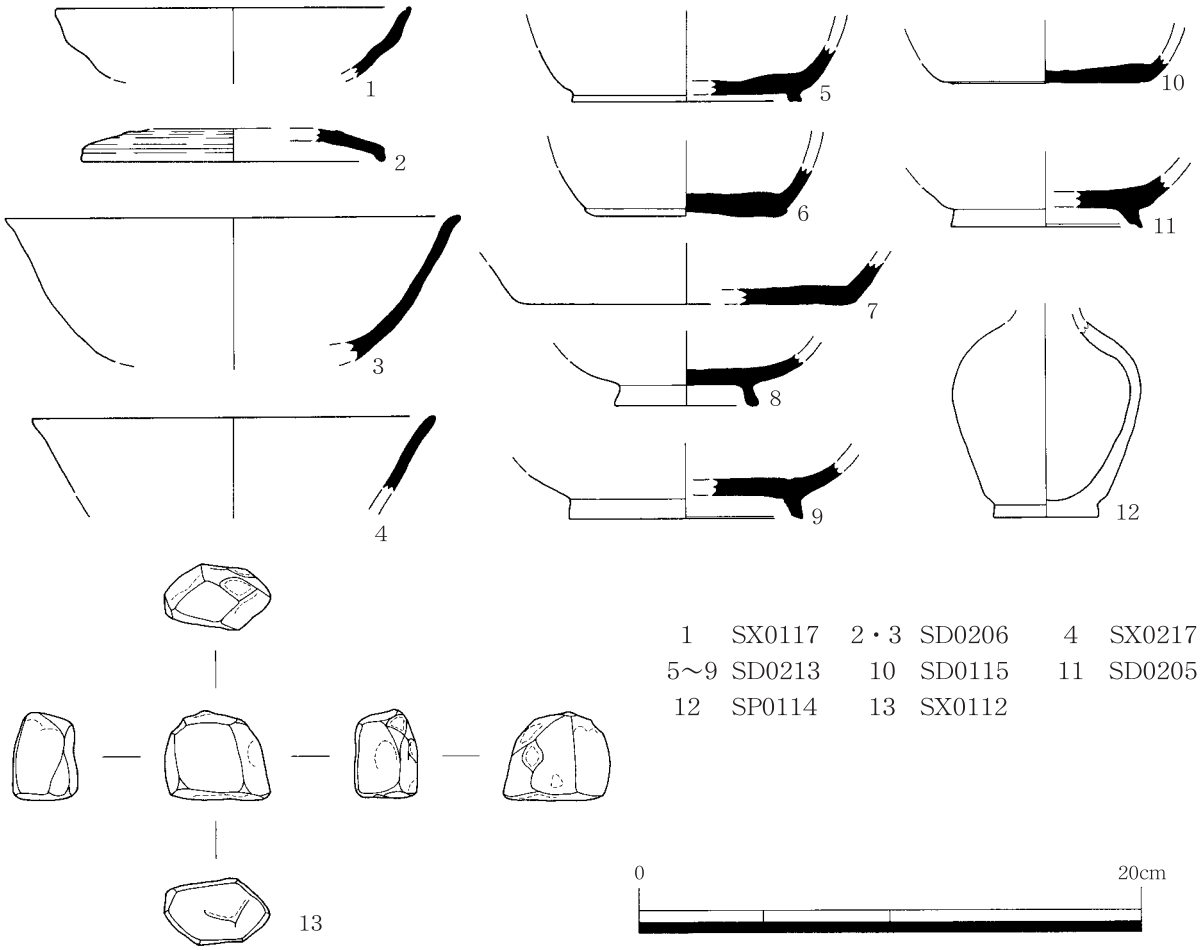


図9　遺構内出土遺物　1：3

れている。高台の高さは0.8㎝とやや高い部類に入る。底部は糸切り後にナデ調整を施している。内面はミガキを施し、外面はナデ調整である。底部内面には重ね焼きの痕跡と考えられる凹凸が確認できる。胎土は精良。還元が十分でないため黄灰色を呈するが、硬質の焼成である。年代は10世紀中頃。

10は水田暗渠SD0115出土の須恵器杯Ａである。底部の直径は8.3㎝。残存する高さは1.1㎝。直線的な底部から斜め上方へ体部が立ち上がり、底部と体部の境は明瞭である。底部外面はヘラ切り後にヘラケズリを施している。体部内外面と底部内面はナデ調整。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。9世紀前半。

11はSD0205出土の緑釉陶器素地。器種は椀で須恵質である。高台の直径が7.5㎝、残存する高さが2.0㎝、高台の高さが0.8㎝。底部は直線的で、体部は内湾して立ち上がる。高台は有段輪高台で底部と体部の境に貼り付けられている。底部外面は丁寧にヘラケズリとナデによって調整され、糸切りの痕跡を確認することはできない。体部内外面と底部内面は丁寧に磨かれている。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。10世紀中頃と推定。

12はSP0114から出土した土師器の小型壺である。口縁が残っていないので口径は不明。底部の直径は2.1㎝、残存する高さは7.7㎝。平底で高台はなく、底部外面は糸切り後にヘラケズリを施している。胴部は丸みをもち、肩部がやや張った形態である。口縁部は欠損するが、おそらく筒状の口縁であると思われる。胴部は内外面ともにナデ調整。胎土は精良だが、焼成はやや軟質で灰褐色を呈す。10世紀前半か。

13はSX0112から出土した石英の塊である。大きさは4.0㎝×3.5㎝×2.5㎝。全体的に白色だが、表面にはガラス質状の光沢がある。重さは53ｇ。

（2）包含層出土遺物（図10）

遺構面（黄灰色粘質土）の上層に堆積していた灰色粘質土（包含層）は多くの遺物を含んでいた。包含層の性格を把握するために同層出土の遺物について詳細を記す。

須恵器

杯Ｂ蓋（14～16）　天井部は低く平らで中位から端部にかけて大きく曲げられ「Z」字状となる。口縁端部は下方へ強く屈曲する。中心部まで残存するものがないため、つまみの有無は不明である。口径が12.6㎝のもの（14）と16.0㎝前後のもの（15・16）がある。器高はともに1.5㎝前後。いずれも天井部をヘラケズリで平らに仕上げ、それ以外の部分はナデで調整している。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色ないし灰色を呈す。9世紀前半。

杯Ｂ（17～20）　高台のある杯。17は口径が16.9㎝、器高はおよそ5.0㎝。高台の直径は10～12㎝のもの（18・19）と8㎝以下のもの（20）がある。直線的な底部から斜め上方へ立ち上がる体部をもち、底部と体部の境は強く屈曲する。高台の形状は下端が外側へふくらむもの（18）と断面方形のもの（19・20）があるが、どちらも底部と体部の境から少し内側に貼り付けられ、少し外に踏ん張っている。底部外面はいずれもヘラ切り後にヘラケズリを施している。17と18は

底部と体部の屈曲部の体部側をヘラケズリで調整しているが、19と20の体部はナデ調整のみである。内面はすべてナデ調整。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色ないし灰色を呈し、断面がセピア状になるもの（18～20）もある。9世紀前半の特徴をもつ。

杯A（21～23）　高台のない杯。口径は不明。底部の直径は9.0～10.0㎝。平らで直線的な底部から斜め上方へ体部が立ち上がる。底部と体部の境は明瞭で屈曲が強い。回転台からヘラ切りで切り離した後、底部外面をヘラケズリで調整する。体部および内面はナデ調整である。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。9世紀前半に属す。

杯（43）　口径18.0㎝。底部から口縁部に向かって斜めにまっすぐ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸い。調整は内外面ともにナデ調整。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。断面がセピア状になる。口径の大きさから考えて杯Bの可能性がある。9世紀前半。

鉢（44）　斜めに立ち上がった体部中位から口縁部にかけて内湾し、口縁端部が外側にふくらんで玉縁状を呈す。器壁は薄く、玉縁部との境は明瞭である。調整は内外面ともにナデ調整である。口径20.0㎝。胎土は精良。焼成は硬質で灰色を呈す。京都府亀岡市に所在する篠窯跡群で生産された、いわゆる「篠鉢」と呼ばれる玉縁状口縁をなす一群に特徴が似ており、10世紀中頃～後半の製品と考えられる。

盤A（48）　体部が口縁まで斜め上方へ延びる。口縁端部はナデによってわずかにくぼみ、外側に少しふくらむ傾向にある。口径は35.2㎝。体部の内外面はナデ調整が施されている。胎土は直径1㎜程度の石英や長石粒を含む。焼成は硬質で青灰色を呈す。9世紀前半の製品と考えられる。

平瓶（41）　小型品の破片である。体部の最大径は11.8㎝。口頸部は残存していない。平らな体部上面から鋭角に屈曲して底部に向かう。体部は内外面ともにナデ調整。胎土には細かな砂粒を含む。焼成は硬質で灰色を呈す。時期は特定できない。

瓻(42)　小型の瓻。口頸部は残存していない。体部の最大径は中位にあり、10.4㎝。底部は丸く、体部は球体をなす。体部中位に円孔を穿つ。体部下半をヘラケズリで調整し、上半をナデで調整する。体部中位に沈線を施し、その上位に波状文を描く。5世紀前半か。

緑釉陶器

椀A（24～29）　体部が内湾して立ち上がり、口縁端部が外反するタイプ（24）と体部が直線的に立ち上がり、口縁端部がほとんど外反しないタイプ（25）がある。口径は、前者が15㎝前後、後者が13㎝前後である。両者とも内外面を丁寧に磨いて施釉している。高台の形態は、いわゆる近江系の有段輪高台（27・28・29）と断面方形（26）の2種類がある。有段輪高台には細くて高いタイプ（28）と太くて低いタイプ（27・29）があり、前者が高さ0.8㎝程度に対して、後者は高さ0.4㎝程度である。また、高台の直径はタイプに関係なく6㎝前後と7.5㎝前後に分かれる。断面方形の高台は、高さが0.5㎝前後で直径が約7㎝。高台と体部の境界が高台を貼り付ける時のナデで少しくぼんでいる。底部外面の調整は、有段輪高台も断面方形の高台も糸切り後にナデを施す。底部内面は丁寧に磨かれている。施釉は、いずれも全面に確認できる。1次焼成は、24・25・27が須恵質、26・28・29が土師質である。

素地（30～34）　施釉されていない緑釉陶器である。１次焼成のみで２次焼成が行われていない。30～33は須恵質、34は土師質。30・31・33・34は椀である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部が外反する。高台はいわゆる近江系の有段輪高台で、いずれも高さが0.5㎝以下の太くて低いタイプである。口径は12.8㎝、高台の直径は6.5～7.0㎝。底部外面は糸切り後にナデ調整で仕

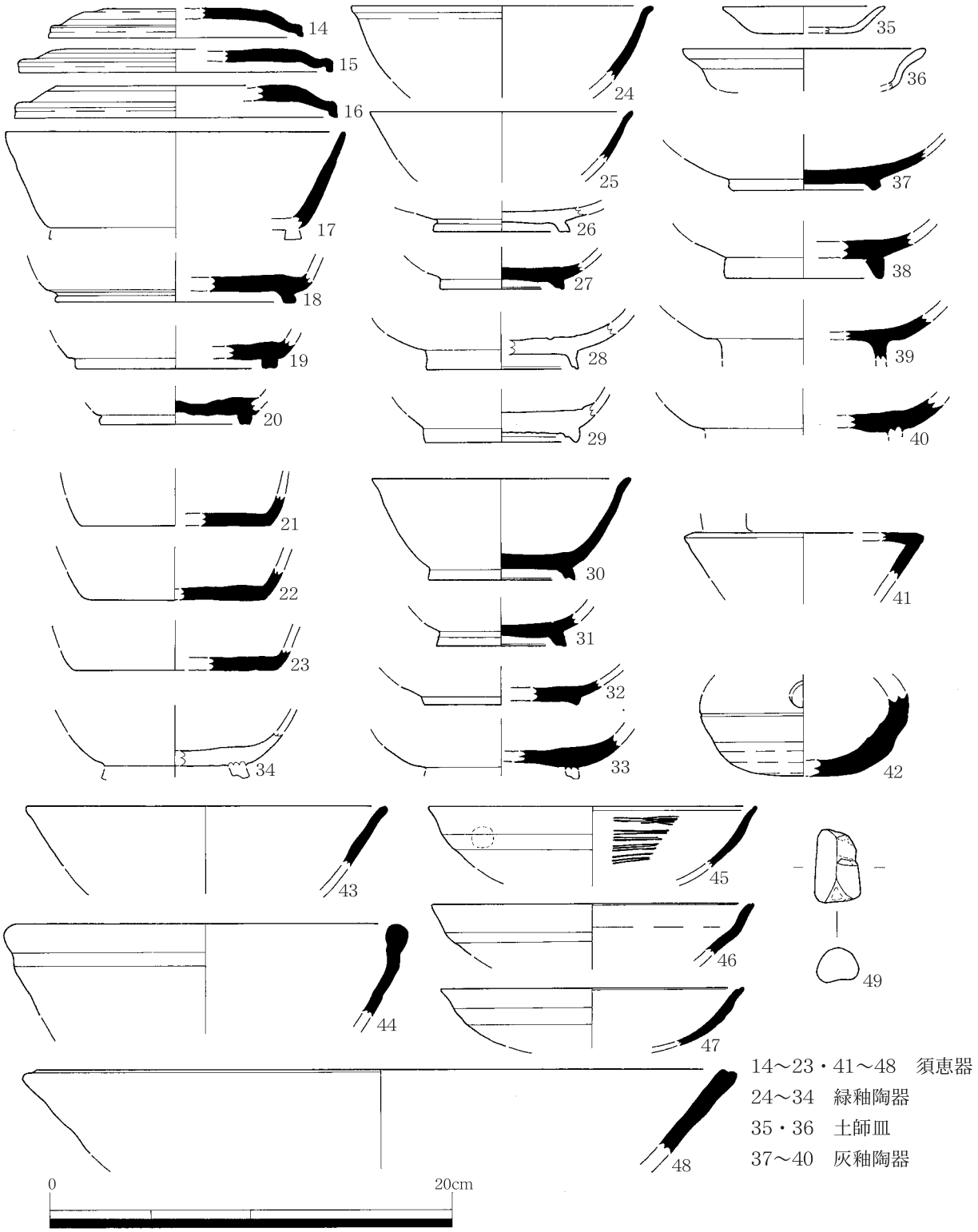


図10　包含層出土遺物　1：3

上げられ、底部内面はナデ調整、体部は内外面ともにミガキが施されている。

32は皿である。高台の直径は7.5㎝。体部は直線的に斜めに立ち上がる。高台は削り出しの円盤状高台で、高さ0.2㎝。高台を削り出しで形成した後、底部外面をナデで調整している。また、体部内外面および底部内面もナデ調整である。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。

灰釉陶器（37～40）　体部が内湾気味に立ち上がる椀である。高台の形態は、①低いもの（37）、②断面が二等辺三角形（38）、③三日月形（39）の3パターンがみられる。①は高台の下端外側を面取りしている特徴がある。内面をミガキで仕上げ、外面をヘラケズリとナデで調整している点は共通している。38と39は底部内面まで施釉されているが、37と40は底部内面に施釉されていない。また、底部外面と高台部分はすべて施釉されていない。おそらく、体部上半部のみの施釉と推測される。胎土は精良。焼成は硬質で灰色ないし黄灰色を呈す。高台の特徴などから猿投窯における折戸53号窯式と東山72号窯式に相当すると考えられ、10世紀の製品と推定できる。

土師皿（35・36）　35は体部上半が少し外反する特徴をもつ。口縁端部は丸い。内面に右上がりのナデ上げがみられ、口縁部はヨコナデで仕上げられている。体部外面下半にはわずかにユビオサエの痕跡もみられる。口径8.0㎝、器高1.3㎝。胎土は精良だが、焼成は軟質で灰白色を呈す。36は口縁部が強く外反し、肥厚する特徴がある。口縁端部は丸い。内面に木目痕跡があり、内型つくりの手法を用いられたと考えられる。口縁部はヨコナデで調整し、外面下半にはユビオサエの痕跡がみられる。口径12.0㎝、器高約2.0㎝。胎土は精良だが、軟質で灰褐色を呈す。平安京で出土した土師皿の分類基準を援用すると、35がⅠタイプ、36がＧタイプになる。両者とも15世紀の製品と考えられる。

瓦器椀（45～47）　体部は底部からやや内湾気味に立ち上がり、中位あたりで屈曲して口縁部へ延びる。腰が張る形状である。口縁端部の内側には沈線がめぐる。口径は15.0～16.0㎝。器壁は5㎝に達する部分もあり、分厚い傾向である。45は黒色層がよく残り、細いミガキが多く施されている様子がよくわかる。46・47も表面に黒色層が確認できるが、わずかである。また、45の外面にはユビオサエの痕跡がわずかにみられる。口径は15.0～16.0㎝。器壁の厚さや器形の特徴から近江産と考えられる。12世紀後半の製品。

（3）その他の出土遺物（図11）

上記以外から出土した土器について詳細を記す。主に遺構精査の際に出土したものである。土器以外には砥石（71）が1点出土している。

須恵器

杯Ｂ蓋（50～52）　平らで直線的な天井部は中位から端部にかけて強くＺ字状に屈曲し、口縁部に達する。口縁端部は下方に強く屈曲する。口径12.0㎝の小型のもの（50）と、口径15～18㎝前後のもの（51・52）がある。51にはつまみの剥離した痕跡が確認でき、剥離の状況から宝珠形つまみと推測される。器高は1.0～1.5㎝程度で全体的に扁平あるが、52は0.8㎝と特に扁平である。天井部はヘラ切り後にヘラケズリで調整し、屈曲部から内面にかけてはナデ調整を施して

いる。一部に口縁端部にヘラケズリを施すものもみられる。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈し、断面がセピアになるものもある。9世紀前半。

杯B（53）　高台のある杯。高台の直径は8.5㎝。平らな底部から体部が斜め上方へのびる。底部と体部の屈曲は強く、その境に菱形のような断面をした高台が貼りつく。底部外面はヘラケズリで調整され、体部と底部内面はナデ調整である。胎土は細かな砂粒を含むが精良である。焼成は硬質で青灰色を呈す。断面がセピアになっている。9世紀前半に属す。

杯A（54）　高台のない杯。底部の直径は8.5㎝。直線的な底部から体部は斜め上方へ立ち上がる。底部と体部の境の屈曲は強い。底部の外面はヘラ切りの後にヘラケズリで調整している。体部および内面はナデ調整である。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。9世紀前半の製品である。

杯（55～57）　やや小型の杯。口径は11.0～13.6㎝。底部から斜め上方へ真っ直ぐ立ち上がる体部をもつ。体部内外面ともにナデ調整を施している。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色または灰色を呈す。断面がセピアになるもの（56）もある9世紀代と考えられる。

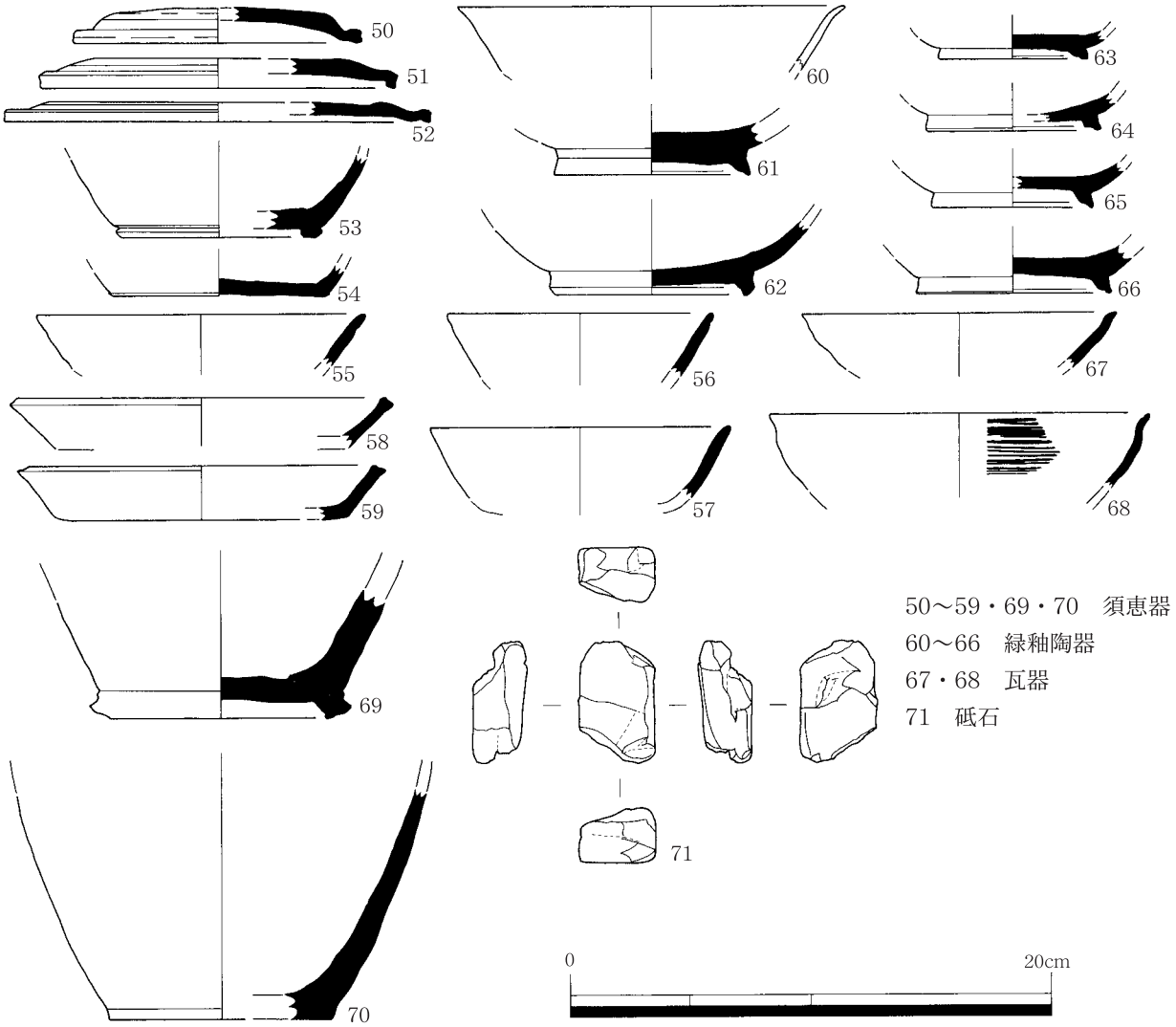


図11　その他の出土遺物　1：3

皿C（58・59）　扁平な高台のない皿。直線的な底部から斜め上方へ立ち上がる体部をもつ。器高は2.0㎝程度。口径15.0～16.0㎝。口縁端部が玉縁状に肥厚するもの（58）と口縁端部は四角い断面形態をなし、端部中央がわずかに凹むもの（59）がある。底部はヘラケズリの後にナデ調整を施し、丁寧に仕上げている。体部および内面はナデ調整である。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。9世紀前半の製品である。

壺A（69）　平らな底部から斜めに立ち上がり、おそらく球形の胴部をなすと思われる。底部と胴部の境に外方に踏ん張る高台がつく。高台の直径は10.8㎝。残存する器高は5.3㎝。底部はヘラケズリで調整し、体部および内面はナデ調整である。胎土は精良。焼成は硬質で灰色を呈す。9世紀初頭の製品である。

壺G（70）　高台のない平底の壺。底部の直径は9.2㎝。残存する器高は9.4㎝。平らな底部から真っ直ぐ立ち上がる細長い胴部をもつ。底部外面はヘラケズリで調整している。体部および内面はナデ調整である。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。9世紀初頭。

緑釉陶器

椀A（60）　体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端部の外反度は大きくない。椀A2類に属す。口径は16.0㎝。体部は内外面ともに丁寧に磨かれ、釉薬が施されている。1次焼成は土師質に焼き上げられ、やや軟質である。胎土には細かな石英や長石の粒子を含んでいる。10世紀中頃の製品である。

素地（61・63～66）　釉薬の施されていない緑釉陶器。1次焼成のみの製品で、すべて須恵質に焼き上がっている。器種はすべて椀である。高台はすべて貼り付けの有段輪高台で、いわゆる近江型の緑釉陶器である。高台の細くて高いタイプ（61・65・66）と低くて太いタイプ（63・64）がある。高台の直径は6.0㎝～8.0㎝である。底部は糸切り後にナデ調整が施され、底部内面と体部は丁寧に磨かれている。胎土は精良。焼成は硬質で灰色または青灰色を呈す。10世紀中頃の製品である。

灰釉陶器（62）　内湾気味に立ち上がる体部をもつ椀である。底部と体部の境にはやや退化した三日月型の高台が貼り付けられている。高台の直径は8.5㎝。釉薬は体部内面に確認できるが、底部内外面および体部外面にはみられない。内面は丁寧なミガキ調整が施され、外面はナデ調整が施されている。胎土は精良。焼成は硬質で淡灰色を呈す。高台の特徴などから10世紀前半の猿投窯の折戸53号窯式に相当すると考えられる。

瓦器椀（67・68）　底部から直線的に立ち上がる体部は中位付近で屈曲し、腰の張った形状をなす。口縁端部には沈線がめぐらされている。器壁は厚みがあり、0.5㎝に達する部分もある。内面には細いミガキが比較的丁寧に施されている。外面はナデ調整である。胎土は精良だが、焼成は軟質である。13世紀前半のものと考えられる。

4. まとめ

(1) 出土遺物

本調査では9世紀から15世紀にかけての遺物が出土したが、それらを時期ごとのまとまりにすると、9世紀前半から中頃と10世紀中頃にピークがある。その他の時期の遺物の割合は少ない。

遺物の多くは包含層から出土したものであるが、遺構から出土した遺物も一定量ある。ただし、9世紀代の遺物だけが出土する遺構はなく、9世紀代と10世紀代の遺物が混在した状況であった。したがって、出土遺物の観点から9世紀代の遺構を抽出することは困難である。

また、出土遺物の中で特徴的なのは緑釉陶器が多く出土したことである。水口町北部の春日地域には緑釉陶器の窯が存在する。平成21年に（財）滋賀県文化財保護協会が行った春日北遺跡の調査では非常に良好な緑釉陶器の窯跡が確認されている。北脇遺跡で出土した緑釉陶器もおそらく春日地域で生産されたものとみて間違いない。釉薬のかかっていない素地がある程度まとまって出土していることから考えても北脇遺跡と春日の緑釉陶器生産地の密接な関係が推測できる。

(2) 遺構の主軸方位

本調査で検出した主な遺構を主軸方位で比較してみると、次の表のようになる。

遺構名	主軸方位	グループ	出土遺物の年代
SA0124	N23°E	②	
SB0125	N33°E	③	12世紀以降
SD0204	N15°E	①	9・10世紀
SD0206	N15°E	①	9・10世紀
SD0213	N25°E	②	9・10世紀
SD0214	N35°E	③	

上記の表から検討すると、主軸方向は下記の3つのグループに分けられる。

グループ①　北で東へ15°前後振る。

グループ②　北で東へ20°～25°振る。

グループ③　北で東へ30°以上振る。

各遺構の出土遺物の年代と照らし合わせると、グループ①と②は10世紀、グループ③は12世紀以降となる。グループ①と③は遺構の方位では少しずれるが、遺物の年代に差異はなく、同時期と考えて良い。

また、水口町西部では甲賀郡統一条理の方位が北で東へ33°振ることが明らかになっている。この方位は上記のグループ③に類似する。つまり、グループ③の遺構は甲賀郡統一条理に沿って方位が規定されていると推測できる。

なお、西側の隣接地で実施した北脇遺跡第4次調査の成果と比較しても遺構の方位に大きな齟

齬はなく、ほぼ同じ方位を指向していることがわかる。ただし、第４次調査で確認されている北を指向する方位の遺構群は本調査では確認できなかった。

以上のように今回の調査では大きく２つの時期の遺構を確認することができた。また、遺構の存在はわからなかったが、9 世紀代の遺物が一定量出土したことから周辺に 9 世紀代の遺構が広がっている可能性が考えられる。

また、まとまった数の緑釉陶器や釉薬のかかっていない素地が一定量出土する状況から考えて、春日地域の窯跡との関係性も想定できる。

今回の調査は小規模なものであったが、多くの知見を得ることができた。これらの調査成果は 9 世紀から 10 世紀にかけての水口盆地の様相を明らかにする上で、非常に重要なものとなり得るだろう。今後の北脇遺跡の調査にも期待したい。

第３章　下川原遺跡第10次調査

1．調査概要

（1）調査経緯

積水化学株式会社滋賀水口工場の造成計画に伴い、約40,000㎡を対象に平成18年６月28日～７月31日にかけて甲賀市教育委員会で試掘調査を実施したところ、遺跡の存在を確認し、対象地のほぼ全域にわたり遺構が存在することが判明した。その後、事業内容の変更があり、両者の間で協議を行った結果、構造物によって地下遺構が破壊される範囲を対象として本発掘調査を実施することとなった。調査は市教委を調査主体として平成20年５月19日に着手した。調査面積は約700㎡であった。

（2）調査経過

現地調査

日付	全体	１トレ	２トレ
H21.5.19	プレハブ設営		
H21.5.26	調査地の草刈り プレハブ事務所内の準備		
H21.5.27		重機掘削開始	
H21.5.30		重機掘削終了	
H21.6.2	作業員投入 ～6/4　排水処理・諸準備		
H21.6.6		精査開始 SD0101検出・掘削	
H21.6.9		SD0102検出・掘削	
H21.6.10		SD0103・0104・0105・0106検出・掘削 サブトレ掘削 ⇒ 掘り下げ必要と判明	
H21.6.17		SX0107・SD0108検出・掘削	
H21.6.18		東半分を重機にて掘り下げ	
H21.6.25		SX0109・SK0110・0111・SB0112検出	
H21.6.27		SK0113・0114・SX0115検出	
H21.7.4		SB0116検出	
H21.7.10			重機掘削開始

H21.7.14			フェンス設置・排水準備
H21.7.15			重機掘削終了 SD0201 検出・掘削
H21.7.16		SB0117 検出	
H21.7.17		SX0118 検出	
H21.7.23		SB0117 掘削終了 トレンチ壁面土層図 作成開始	
H21.7.25			SX0118 掘削終了
H21.7.28			SD0202 検出・掘削
H21.7.30			SX0203 検出・掘削
H21.7.31			サブトレ掘削開始
H21.8.2			サブトレ掘削完了
H21.8.5	空撮準備開始		
H21.8.11	地上写真撮影		
H21.8.12	空撮		
H21.8.18		土層図作成完了	
H21.8.19			土層図作成
H21.8.20	撤収作業開始		
H21.8.22	埋め戻し開始		
H21.8.27	埋め戻し完了		
H21.8.28	プレハブ撤収・ 現地調査終了		
H21.8.29	機材整備・片づけ (～ 9/5)		

整理調査　整理調査については平成 20 年度に実施した他の発掘調査との関係から平年 21 年度に実施することし、平成 21 年 4 月から開始し、本報告書の編集・刊行作業を行った。

2. 遺　　跡

(1) 調査地周辺地形

調査地は水口盆地北西部に位置し、北側を水口丘陵に接している。下川原遺跡の東半部にあたり、南側の隣接地を平成 19 年に下川原遺跡第 8 次調査として発掘調査を行っている。この調査では土坑が数多く見つかり、12 ～ 13 世紀代の瓦器が多く出土した。また、下川原遺跡の西半部では店舗建設に伴って平成 17 年に発掘調査が実施され、7 世紀を中心とする竪穴住居が約 50 棟も見

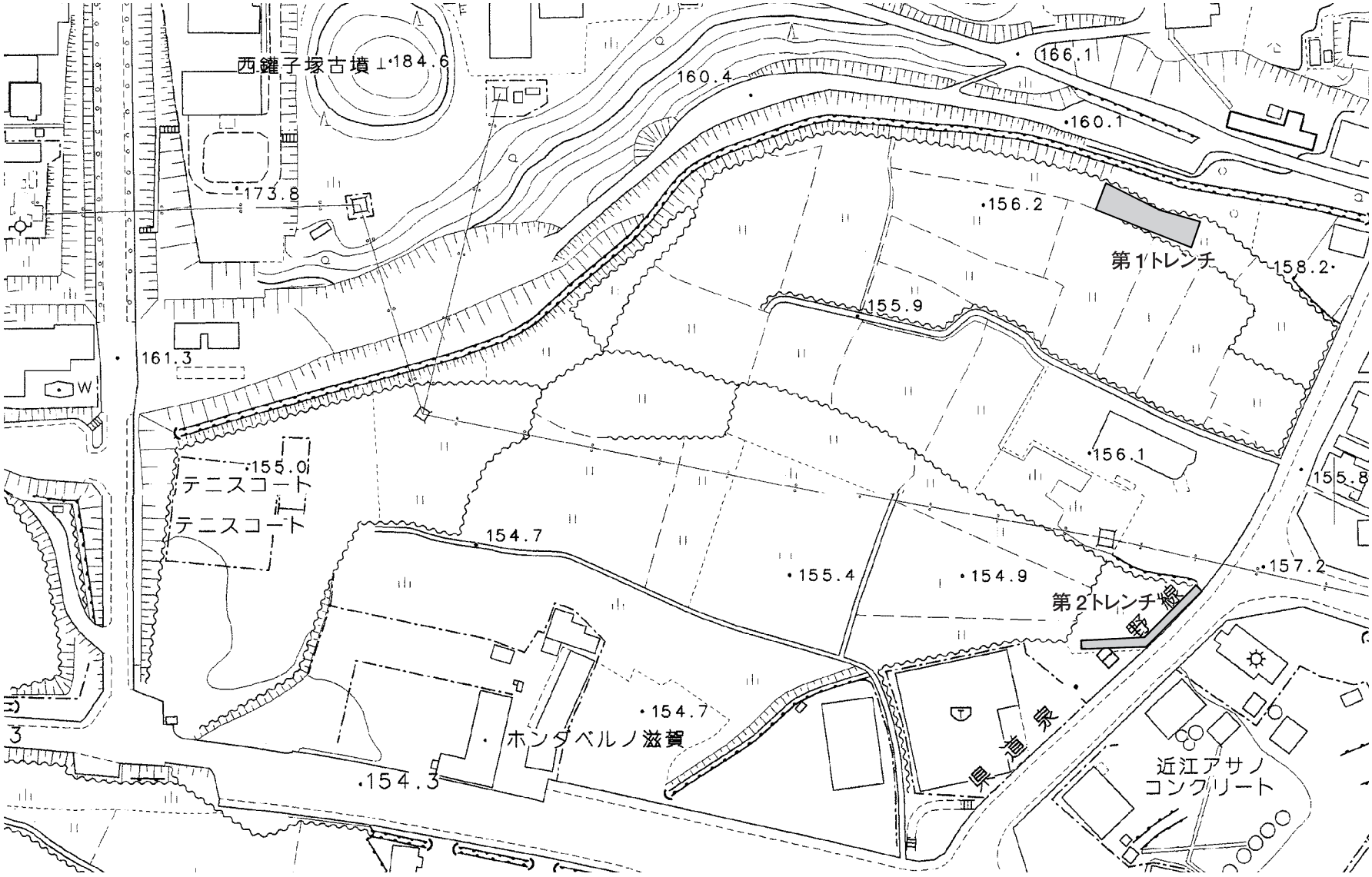


図12　下川原遺跡第11次調査　トレンチ位置図　1：2000

つかっている。

調査地周辺の地形は北から南に向かって緩やかに傾斜し、調査対象地の中央付近で約１ｍの高低差がある。第１トレンチは調査地の北端部に位置し、第２トレンチは南東部に位置する。

（2）第１トレンチ

（a）調査区の位置と規模

調査地の中央北端部に位置する。調査区の北側は丘陵となっており、丘陵の裾に隣接する。面積は約 500 ㎡。

（b）基本層序（第 13 図）

上から①床土、②暗灰褐色粘質土（包含層）、③黄灰色粘質土（遺構検出面）である。遺構は③層の上面ですべて検出しており、遺構面は１層のみであった。遺構検出面の標高はおよそ 155.8 ｍ～ 155.9 ｍである。

（c）遺　　構

本調査区では、竪穴住居１棟、掘立柱建物２棟、土坑９基、溝９条、その他ピットなど多くの遺構を検出した。

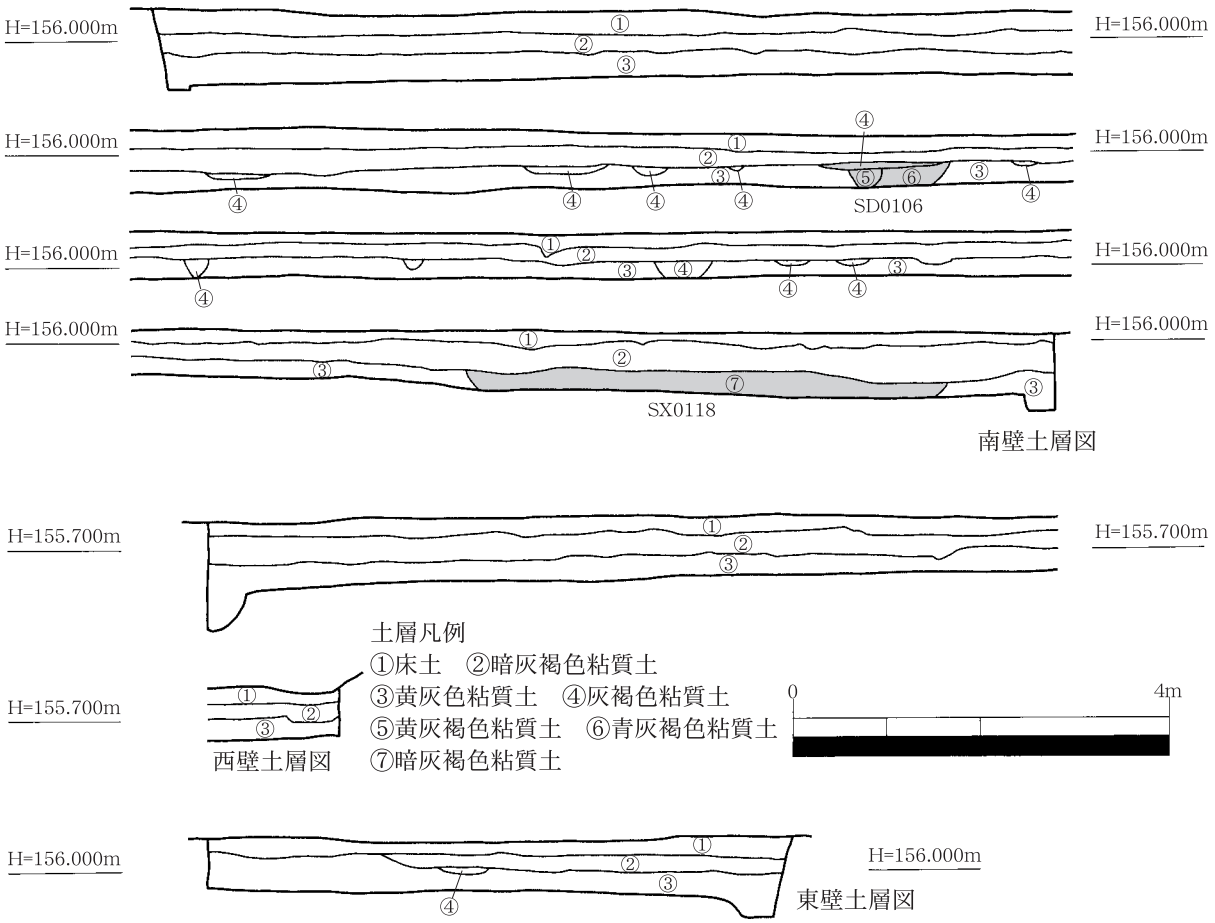
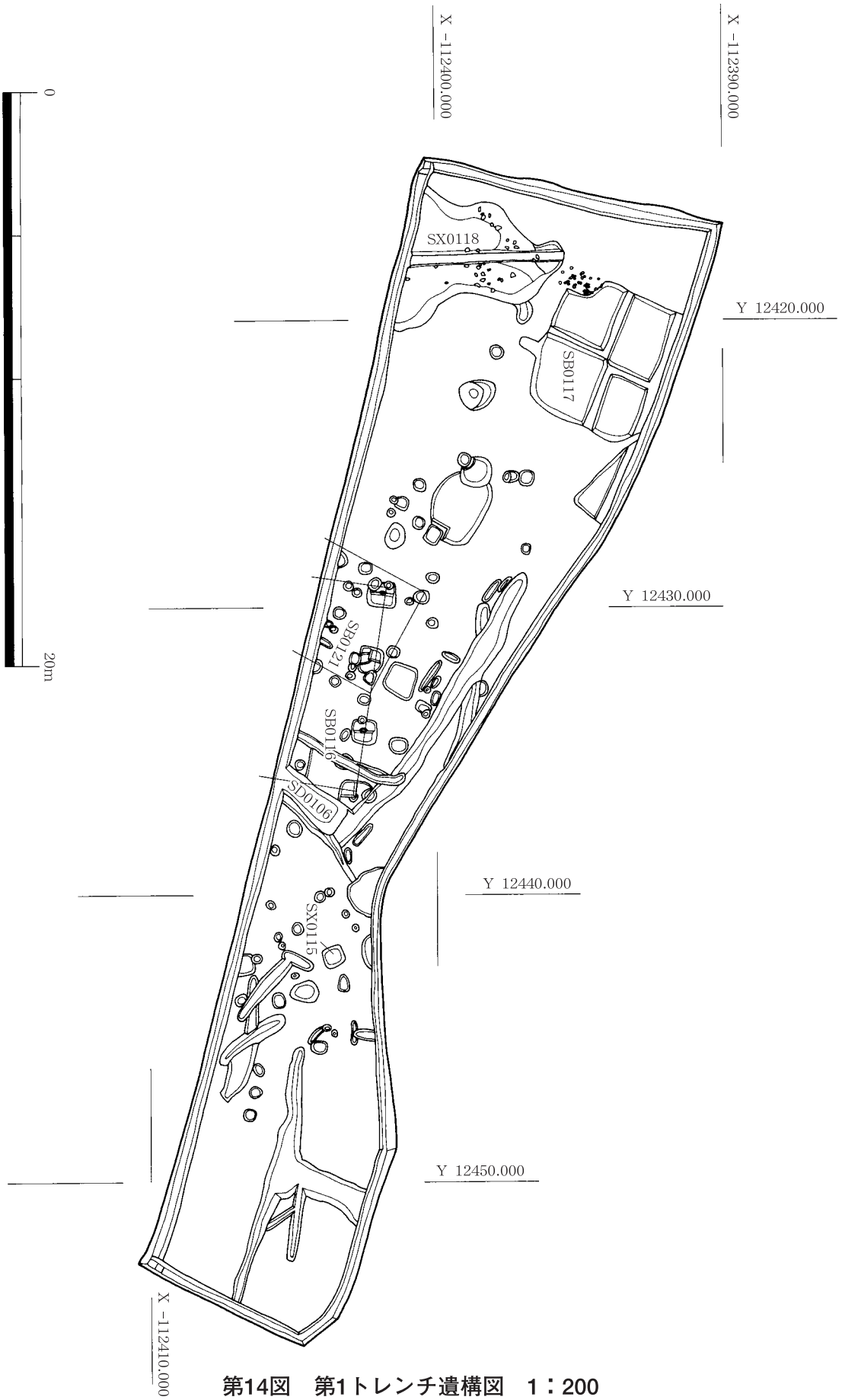


図 13　第１トレンチ土層図　1：80



第14図　第1トレンチ遺構図　1：200

SB0117　調査区西端で検出した竪穴住居。北辺は調査区外になるが、東西５ｍ×南北５ｍの規模になると想定できる。主軸は北で24°西に振っている。

南辺には炭が多く付着している箇所があった。明確な焼土痕跡は確認できなかったが、カマドが存在とした可能性が高い。また、南辺中央付近には炭の溜まった突出部がみられ、煙道の痕跡と推測される。ただし、カマドの構造などが分かる痕跡は確認できなかった。

床面については貼床を確認することはできず、顕著な硬化した部分を観察することもできなかった。埋土は炭混じりの灰褐色粘質土と茶褐色粘質土の２層に分かれ、その下層は黄灰色粘質土の地山層に達した。遺構の残存する深さは約20㎝。

遺物は南辺のカマド跡と考えられる周辺から多く出土した。出土した遺物の量は、土師器31点415ｇ、須恵器13点424ｇである。それらの中には土師器の鉢と壺、須恵器の壺などのほか砥

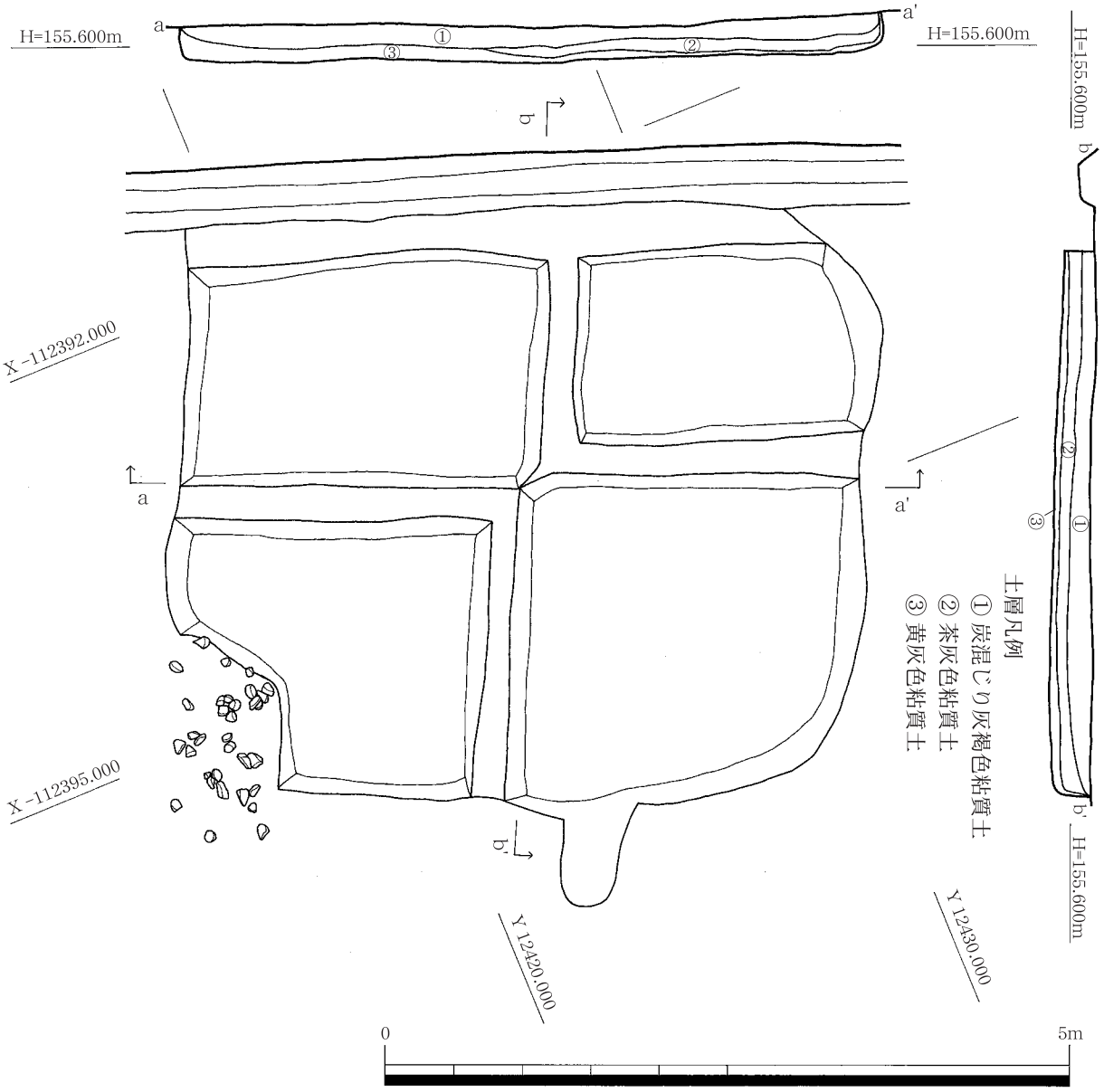


図15　SB0117 平面図・断面図　1：50

石が含まれていた。出土した遺物の年代観から６世紀後半の遺構と考えられる。

SX0118　調査区南西端で検出した楕円形に近い不整形な土坑。確認したのは北側半分。南側半分については調査区外となる。検出した規模は南北 5.5 m×東西 4.7 mで、全体の南北長は約 11 mと推定できる。深さは 20 ㎝～ 30 ㎝、埋土は暗灰色粘質土であった。遺構の主軸は方位に沿っており、傾きはほとんどない。出土した遺物には須恵器の高坏や広口壺、甕などがある。土師器も出土したが細片のため、器種などは不明である。遺構の年代は出土した須恵器の年代観から６世紀後半と考えられる。

SB0116　調査区中央付近で検出した東西３間×南北１間以上の掘立柱建物。柱間は８尺等間。検

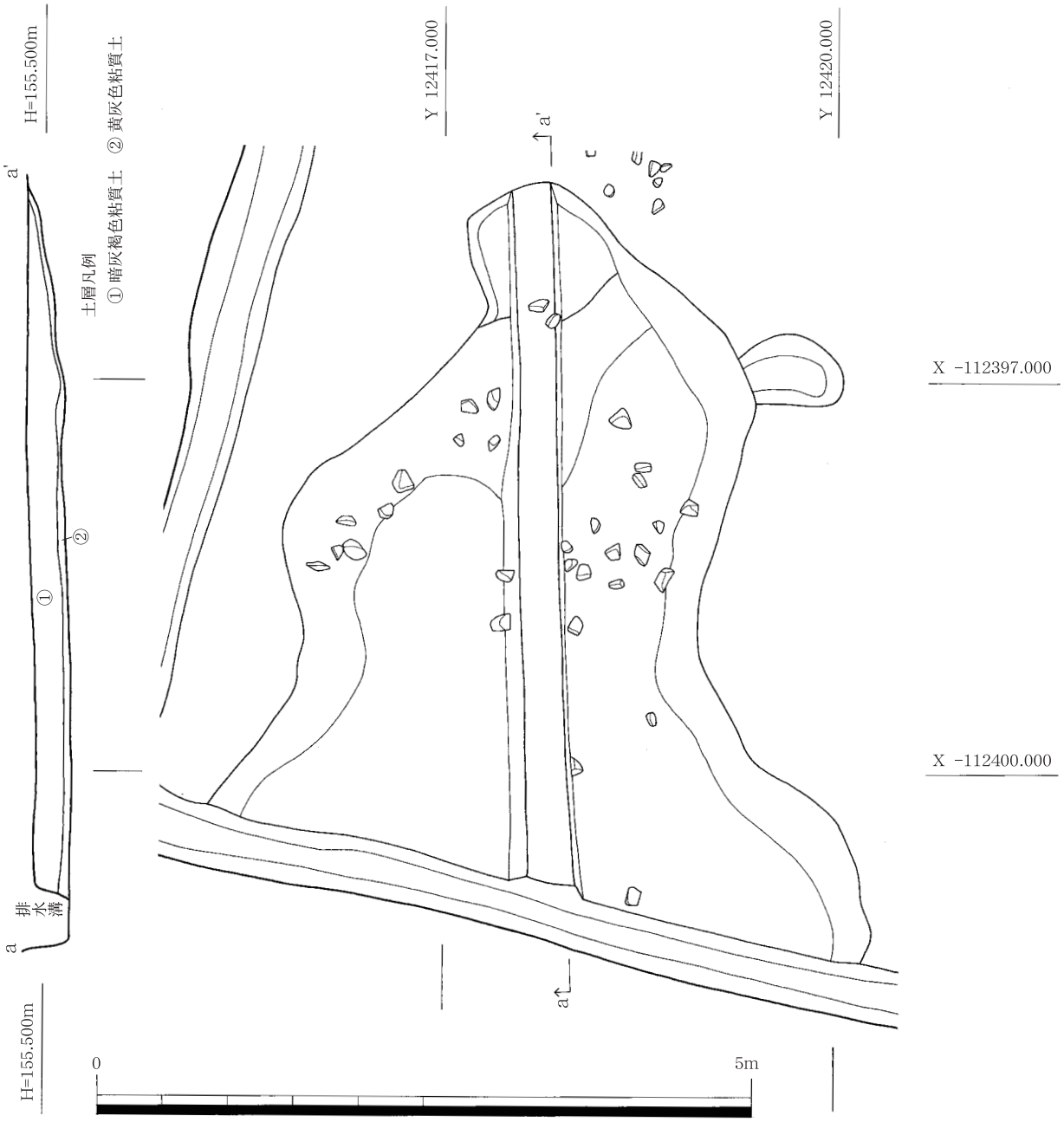


図 16　SX0118 平面図・断面図　1：50

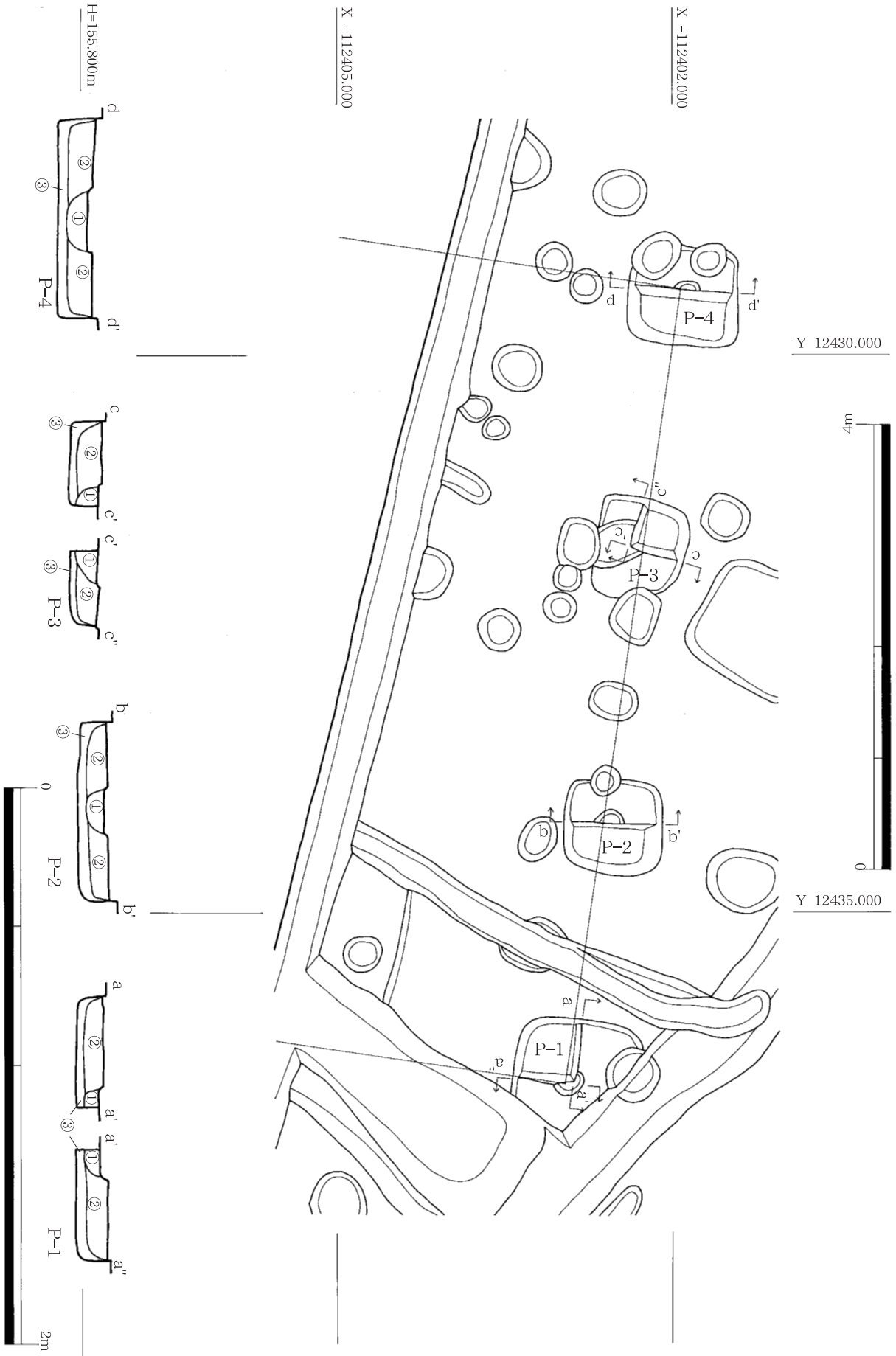


図17　SB0116 平面図（1：50）・断面図（1：20）

出したのは北側の側柱列だけで、それ以外は調査区外になる。検出状況からみて、総柱建物や庇付き建物になる可能性は低いと考えられる。柱掘形は一辺80㎝～90㎝の隅丸方形で、残存する深さは20㎝前後と浅く、遺構としての残りはあまり良くない。遺構の方位は北で東に8°傾く。柱掘形からはほとんど遺物が出土しておらず、出土遺物から遺構の年代を特定するのは難しい状況である。

SB0119　調査区中央付近で検出した東西2間×南北2間以上の掘立柱建物。南側柱列は調査区外になる。柱間は東西が約2.0ｍ、南北が約2.1ｍである。柱掘形は円形に近い形状で、大きさにややばらつきがある。また、柱痕跡も明瞭ではない。柱掘形の深さは15㎝～20㎝と浅い。おそらく

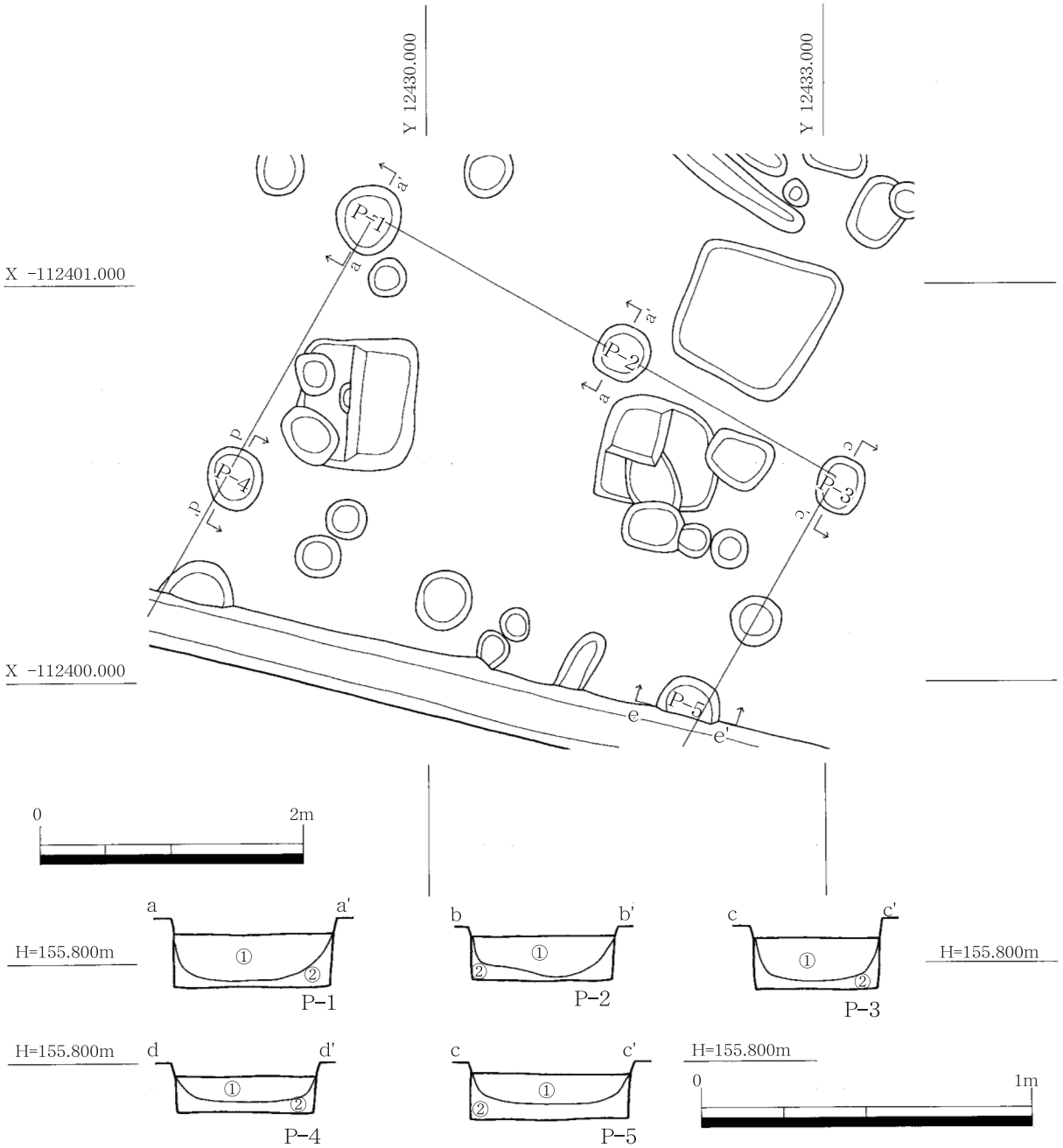


図18　SB0121 平面図（1：50）・断面図（1：20）

残存状況があまり良くないのであろう。遺構の方位は北で東に30°傾く。柱穴からは遺物がほとんど出土していないが、瓦器の細片がみられることから中世の建物であると考えられる。

SD0106　調査区中央付近で検出した南北方向の素掘溝。幅約1.0ｍ、深さ20㎝～25㎝、検出した長さは約３ｍ。溝は南に向かって流れ、調査区の外側へ延びている。また、溝の北端はSB0116の柱穴を切っている。主軸の方位は北で41°東へ振っている。埋土からは須恵器、土師器、白磁などが出土し、幅広い年代の遺物が確認できる。出土遺物の年代観から遺構の年代は18世紀代と考えられる。

SX0107　調査区中央部で検出した方形の土坑。一辺約１ｍのほぼ正方形である。深さは約５㎝と非常に浅い。埋土からは18世紀代の信楽焼の鉢が出土した。

SX0115　調査区中央部東側で検出した方形の土坑。一辺約70㎝の正方形に近い形をしている。深さは約10㎝。埋土から砥石が出土した。

(3) 第２トレンチ

(a) 調査区の位置と規模

調査地の南端に位置するＬ字形のトレンチである。面積は約200㎡。調査対象地は南北の中央付近で北半部と南半部で比高差が約１ｍあり、第２トレンチは下の段に位置する。

(b) 基本層序（第19図）

上から①床土、②淡灰褐色粘質土、③暗灰褐色粘質土、④黄灰色粘質土、⑤灰色砂礫である。④層は第１トレンチの遺構検出面と同じ層であるが、第２トレンチでは北端部のみで確認できるだけで、それ以外では③層が厚く堆積している状況が確認できる。また、第２トレンチの南側で

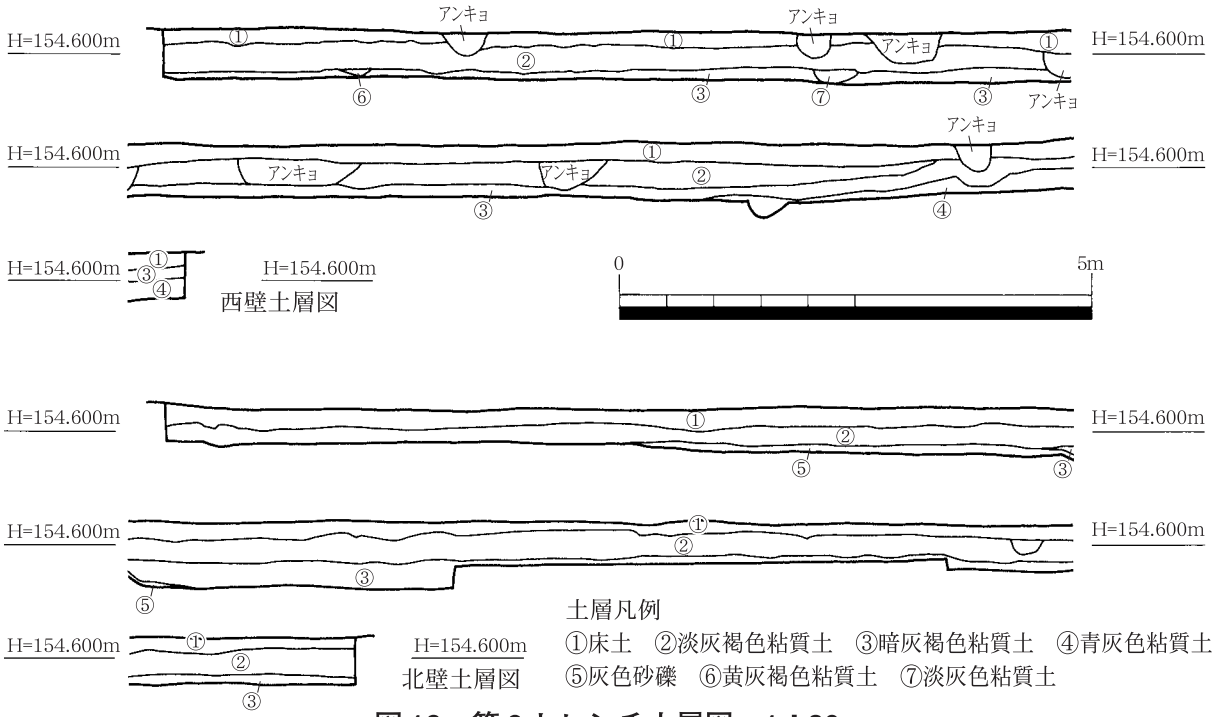


図19　第２トレンチ土層図　1：80

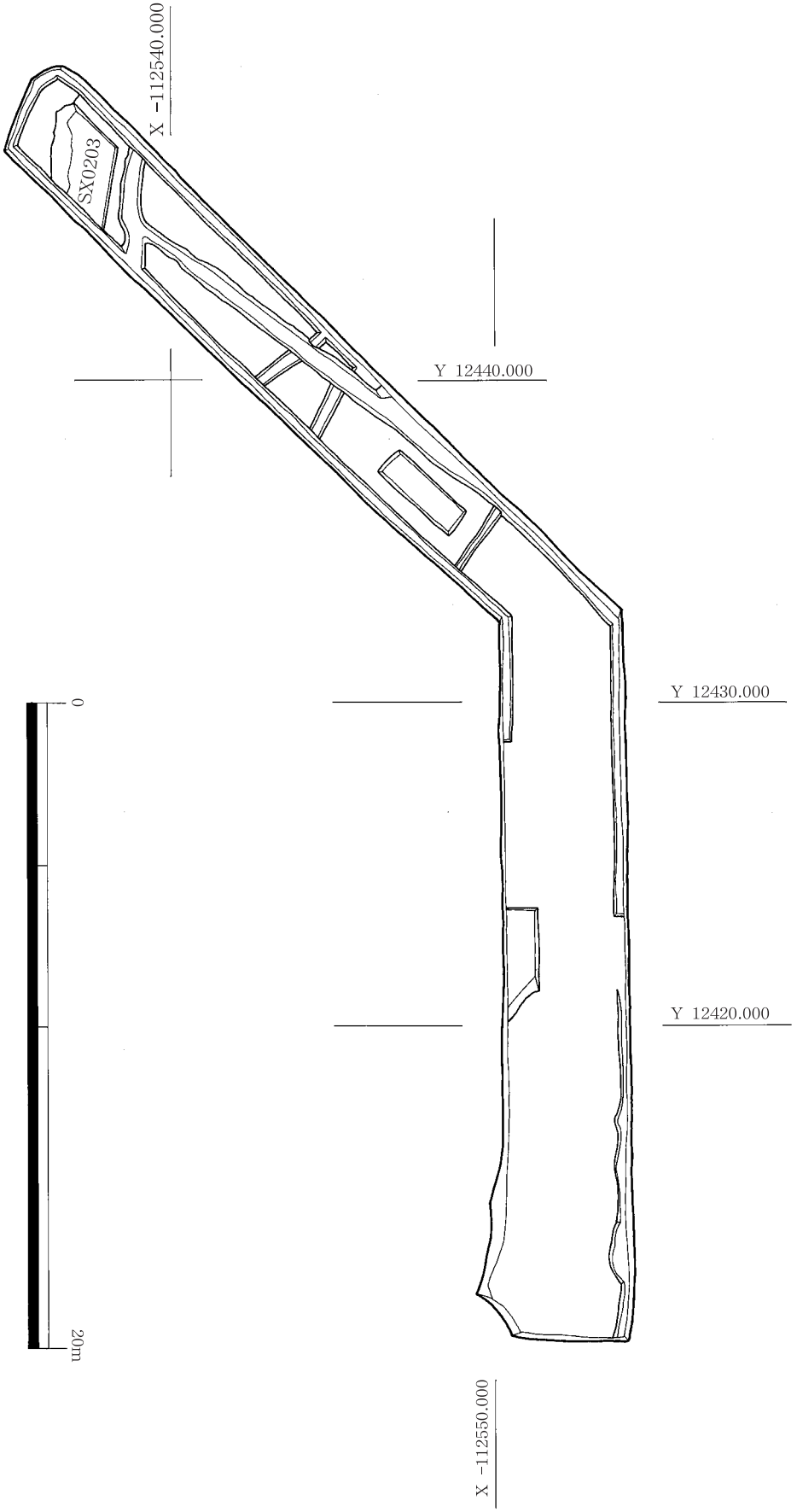


図20　第2トレンチ遺構図　1：200

は③層の下に⑤層が確認できる箇所がある。③層は谷地形の堆積土であると考えられる。

（c）遺　　構

本調査区で検出した遺構は谷地形の落ち込みと水田暗渠のみで、遺跡の性格を示すような遺構は検出できなかった。

SX0203　調査区北端部で検出した谷地形の北端。ここから南には暗灰褐色粘質土が厚く堆積している。かなり深い谷であると推測される。おそらくこの谷が遺跡の南端になると考えられる。埋土の暗灰褐色粘質土からは土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、土師皿、陶器など幅広い時期の遺物が出土し、かなり長い間、谷となっていたことが分かる。

3. 遺　　物

（1）第１トレンチ出土遺物

（a）遺構内出土遺物（図 21）

１～４は竪穴住居 SB0117 出土の遺物である。４は砥石。１は土師器の鉢。口径 18.0 ㎝、器高 10.0 ㎝。比較的平らな底部は中間付近で屈曲して丸みを帯びて体部へつながる。体部は上方へ延び、口縁部でわずかに内反する。全体的な印象は鉄鉢形の器形となる。口縁端部は丸く仕上げられ、端部から幅２㎝ほどの範囲は強いヨコナデ調整が施されている。口縁部を強調したものと考えられる。また、口縁端部の１ヶ所を外側に捻って外反させ、片口状に成形している。底部はヘラケズリで平らに仕上げ、体部外面はハケ目調整の後、ナデによって仕上げられている。内面は丁寧にナデ調整が施されている。胎土には１㎜以下の砂粒を多く含み、やや粗い傾向にある。焼成はやや軟質で黄灰白色を呈す。似たような形状の鉢が植遺跡でも出土している。６世紀後半の製品と推定される。

２は須恵器の長頸壺である。口径 7.3 ㎝。口頸基部は細く、そこから斜め上方へまっすぐ延びて口縁端部に達する。口縁端部は丸くおさまる。口頸部下半外面には２条の平行した沈線があり、それより口縁側ではハケ目の痕跡がみられる。外面はハケ目調整の後にナデが施されている。内面はナデで調整されている。胎土には細かな長石粒を含む。焼成は硬質で青灰色を呈す。

３は土師器の壺である。直立気味に立ち上がるやや高めの口縁部をもつ。胴部の形態は不明。口径 27.3 ㎝。内外面ともにナデ調整で仕上げられている。胎土には細かな砂粒を含む。焼成は軟質で黄灰白色を呈す。

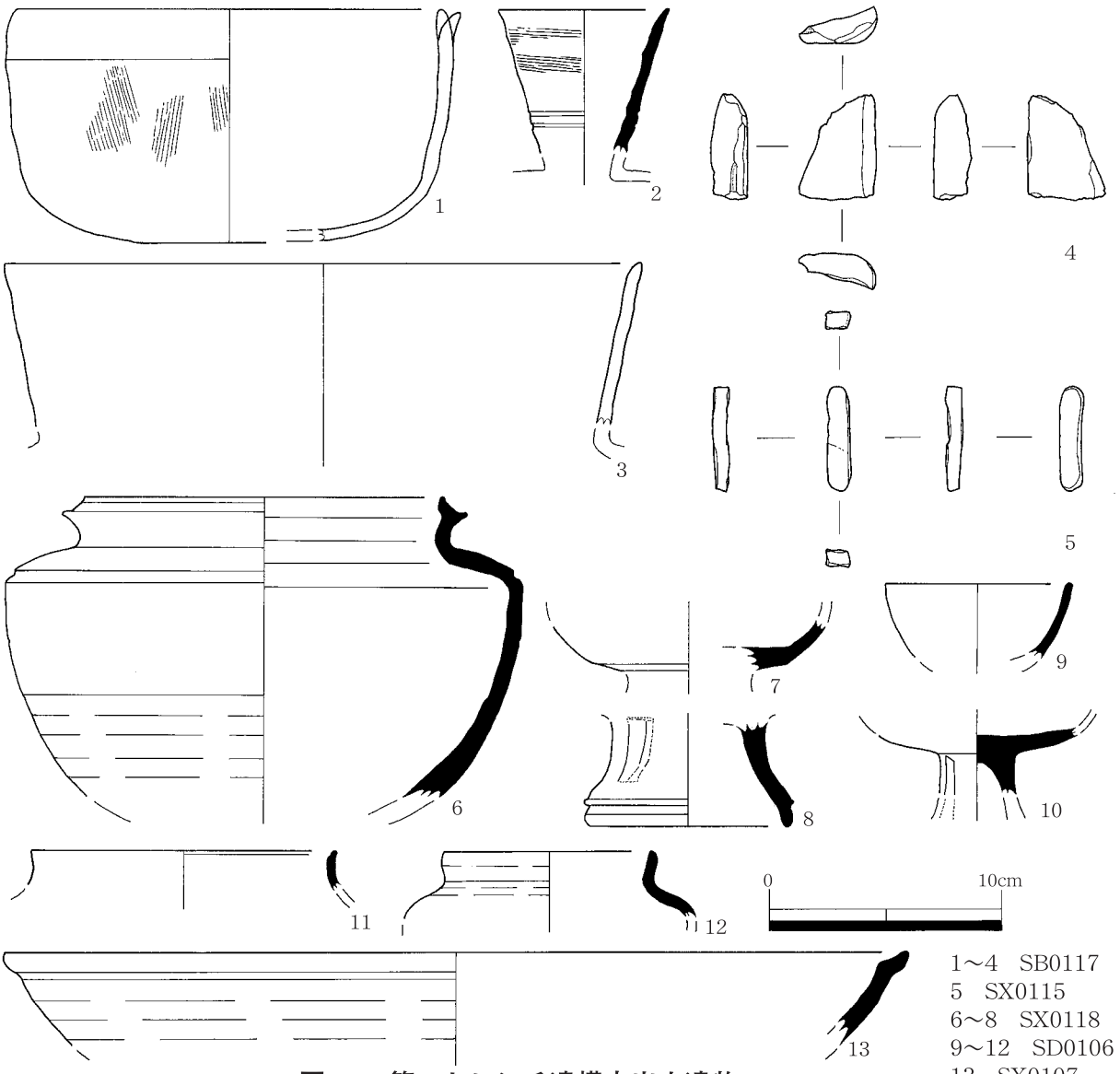
６～８は SX0118 出土の須恵器である。６は広口壺。丸みのある胴部から強く張った肩部で屈曲する。肩部には沈線がめぐっている。口頸部は短く外反する。口縁部は外側と内側の両方に延び、「く」の字状を呈す。口縁端部の形態は受け部状であり、蓋が付く可能性も考えられる。胴部下半はヘラケズリ調整で、胴部上半および口頸部と口縁部はナデ調整で仕上げられている。内面はナデ調整である。胎土には１㎜程度の石英や長石の粒を含む。焼成は硬質で灰色を呈す。

７・８は高坏である。７は杯部の破片。比較的平らな底部から内湾気味に体部が立ち上がる。底部と体部の境は稜をなす。底部中央に基部の太い脚部を貼り付ける。底部外面はヘラケズリ調整、

体部外面および内面はナデ調整を施す。8は脚部の破片。基部が太く、外反気味に下方へ延びる。脚端部は内湾して丸くおさまり、脚端部から少し上の部分に突線が1条めぐる。脚部径は8.4㎝。脚部には長方形の透かし窓があり、3方向に穿たれていると推測される。7・8ともに胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。TK43形式並行期にあたると考えられ、6世紀後半代の製品と推定される。

9～12はSD0106出土土器である。9は小型の白磁椀である。口径8.0㎝。底部から口縁部まで内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くなる。外面に染付が確認できる。江戸時代中期の製品か。

10は須恵器の高坏。杯部はやや丸みのある底部から体部が立ち上がる。底部中央に基部の太い脚部を貼り付けている。脚部は外反して下方へ延び、長方形の透かし窓を3方向に穿つ。杯部は底部外面をヘラケズリ、底部内面をナデによって調整している。脚部はナデ調整で仕上げられている。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。TK43並行期と考えられる。



1～4　SB0117
5　SX0115
6～8　SX0118
9～12　SD0106
13　SX0107

図21　第1トレンチ遺構内出土遺物　1：3

11は須恵器の短頸壺。口径13.1㎝。短く直立する口縁部は器壁が非常に薄く、口縁端部は内側を沈線状にわずかに凹ませる。内外面ともにナデ調整である。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。

12も須恵器の短頸壺。口径8.9㎝。小型の部類に入ると思われる。丸みのある胴部から直立した口縁部はわずかに内湾して口縁端部となる。口縁端部は丸い。口縁端部外側と胴部外面はヘラケズリが施され、それ以外はナデ調整で仕上げられている。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。

13はSX0107出土の信楽焼の鉢。口径38.8㎝。体部は斜め外方へ立ち上がり、口縁端部を外側に屈曲させる。口縁部の内側がわずかに凹んでいる。調整は体部がヘラケズリ、口縁部から内面にかけてはナデである。胎土には砂粒を含んでいる。焼成は硬質で赤褐色を呈す。15世紀後半の製品と考えられる。

(b) 包含層出土遺物（図22）

暗灰褐色粘質土包含層から多くの遺物が出土した。出土した遺物には幅広い時期のものが含まれているが、下川原遺跡の性格を考える上でも重要な知見が得られると考え、その内容について触れることにする。

須恵器

杯H蓋（14・15）　天井部に高く丸みをもつもの（14）と比較的平らなもの（15）がある。両者とも口縁部と天井部の境は稜をなすが、稜は短く鈍い。どちらも天井部外面は1／2以上の回転ヘラケズリが施されている。口縁部および内面はナデ調整である。口縁端部まで残る破片がないために口径は不明であるが、稜の部分の直径で11.0～13.2㎝である。いずれも焼成は硬質で青灰色を呈す。TK43形式並行期にあたる6世紀中頃～6世紀後半の製品と考えられる。

杯H身（16～23）　立ち上がりはわずかに内傾して上方に延び、口縁端部は丸くおさまる。受部は短く水平に延び、断面が三角形になる。底部は比較的浅めでやや丸みがある。いずれも底部の1／2以上に回転ヘラケズリが施されている。口径が10.0～11.5㎝のもの（19～23）、13.0㎝前後のもの（16・17）、16.0㎝前後のもの（18）に大別できる。胎土には石英や長石の細かな粒が含まれている。焼成は硬質で青灰色ないし灰色を呈す。蓋と同じくTK43形式に並行する時期の製品と考えられる。

高坏（24・25）　比較的平らな底部の中央に外反して下方へ延びる脚部を貼り付ける。脚部には長方形の透かし窓が3方向に穿たれている。底部外面はヘラケズリによって調整され、内面はナデ調整である。脚部はナデ調整で仕上げられている。胎土には細かな砂粒が含まれる。焼成は硬質で灰色を呈す。

短頸壺（26～30）　口径が①17.0　のもの（28）、②12.0～14.0㎝のもの（26・27）、③9.0㎝前後のもの（29・30）に分けられる。①はやや外反した口頸部をなし、②と③は直立して上方へ延びる口頸部である。口縁端部はいずれも内側をやや凹ませて段をつくり、①と②は外反させて外

側に屈曲させている。口頸部から口縁部にかけてはナデ調整で仕上げられている。胎土には長石の粒を含んでいる。焼成は硬質で青灰色を呈す。

緑釉陶器 皿（31） 近江系緑釉陶器の特徴である有段輪高台をもつ。高台は幅が広く低い。高台の直径は3.5㎝。底部外面はナデで丁寧に調整され、糸切り痕は不明確である。底部内面はミガキで仕上げられている。釉薬はわずかに確認できるのみでほとんどが剥がれ落ちてしまっているが、底部外面を除いて施釉されていたと考えられる。1次焼成は土師質に焼き上げられ、赤灰色を呈す。胎土は精良である。10世紀後半の製品と考えられる。

灰釉陶器 椀（32） 口径9.4㎝。小型の椀である。内湾気味に立ち上がる体部は口縁部でわずかに外反する。口縁端部は丸い。内外面とも丁寧に磨かれ、釉薬がかけられている。胎土は精良。焼成は硬質で灰色を呈す。10世紀代の製品か。

瓦器 椀（33） 体部は底部からやや内湾気味に立ち上がり、中位あたりで屈曲して口縁部へ延びる。腰が張る形状である。口縁端部の内側には沈線がめぐる。表面には黒色層が残り、細かい平行のミガキが確認できる。器壁はやや厚めである。口径13.7㎝。近江型の範疇に属す。

（2）第2トレンチ出土遺物

SX0203出土遺物（図23）

第2トレンチから出土した遺物のうち、谷状地形SX0203から出土した遺物について詳細を記す。

須恵器

杯H蓋（34） 平らな天井部から屈曲して下方へ延びる。天井部は回転ヘラケズリで調整されているが、ヘラ切りの痕跡が確認できる。内面はナデ調整である。口径は不明。胎土には石英や長石の細かな粒が含まれている。焼成は硬質で青灰色を呈す。6世紀後半の製品か。

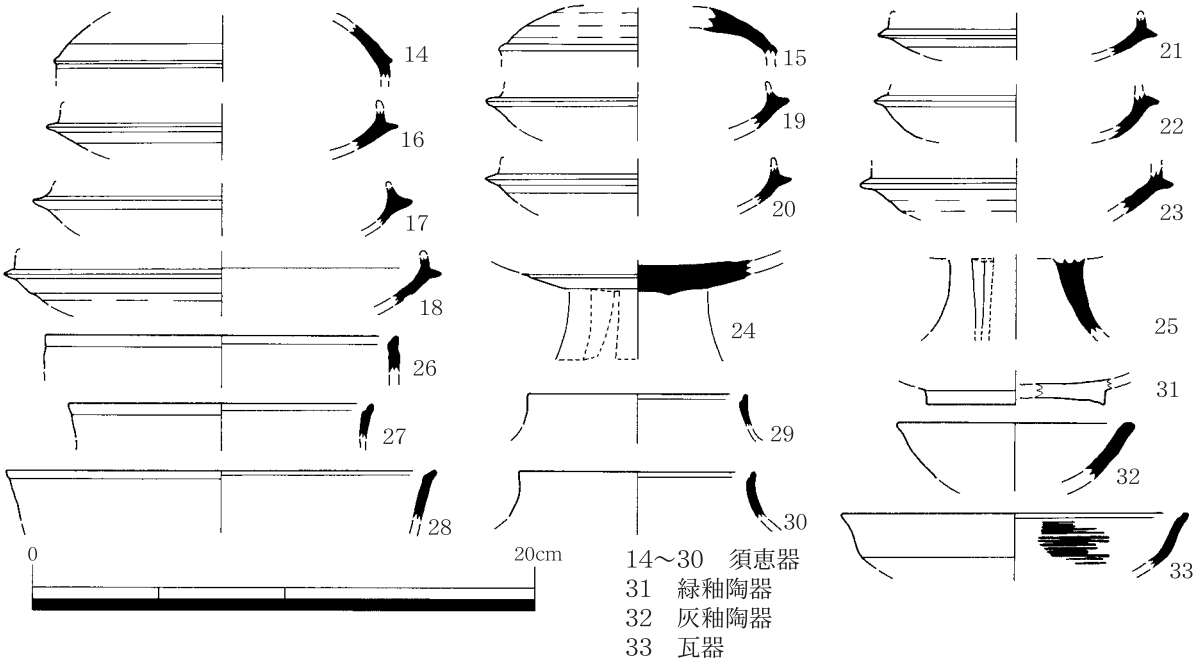


図22 第1トレンチ包含層出土遺物 1：3

杯Ｈ身（35）　立ち上がりはわずかに内傾して上方へ延び、口縁端部は丸くおさまる。受部は水平に延び、断面が三角形をなす。底部は比較的浅く丸みがある。底部外面に１／２以上の回転ヘラケズリが施されている。口径 11.8 ㎝。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。TK43 形式に並行した時期の製品と考えられる。

杯Ｇ蓋（36）　杯Ｈ蓋をひっくり返した器形。比較的低く平らな天井部から斜め下方に延び、口縁部で外反する。口縁端部内側にはかえりをもつ。かえりは口縁端部と同じ高さでおさまる。中心まで残っていないため、つまみの有無についてはわからない。口径 13.5 ㎝、器高 1.9 ㎝。胎土には細かな長石粒が含まれている。焼成は硬質で青灰色を呈し、断面がセピアとなる。TK217 形式に属し、７世紀前半の製品と考えられる。

杯Ｂ蓋（37）　扁平な須恵器の杯蓋。口径 16.8 ㎝、器高 1.0 ㎝。低く平らな天井部は中位から端部付近で屈曲し、端部は下方へ曲げられている。天井部の平らな部分はヘラケズリで調整され、それ以外はナデ調整である。つまみの有無は不明。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。9 世紀前半の製品と考えられる。

杯（38）　須恵器の杯身。口径 13.2 ㎝。底部が残っていないため、高台の有無はわからない。底部から斜め上方へ延びる体部をもち、口縁端部は丸くおさまる。体部外面はヘラケズリで調整され、内面はナデ調整である。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。

高坏（39）　比較的平らな底部の中央に基部の細い脚部を貼り付ける。底部外面はヘラケズリ調整で、内面はナデ調整である。胎土には細かな砂粒を含む。焼成は硬質で灰色を呈す。

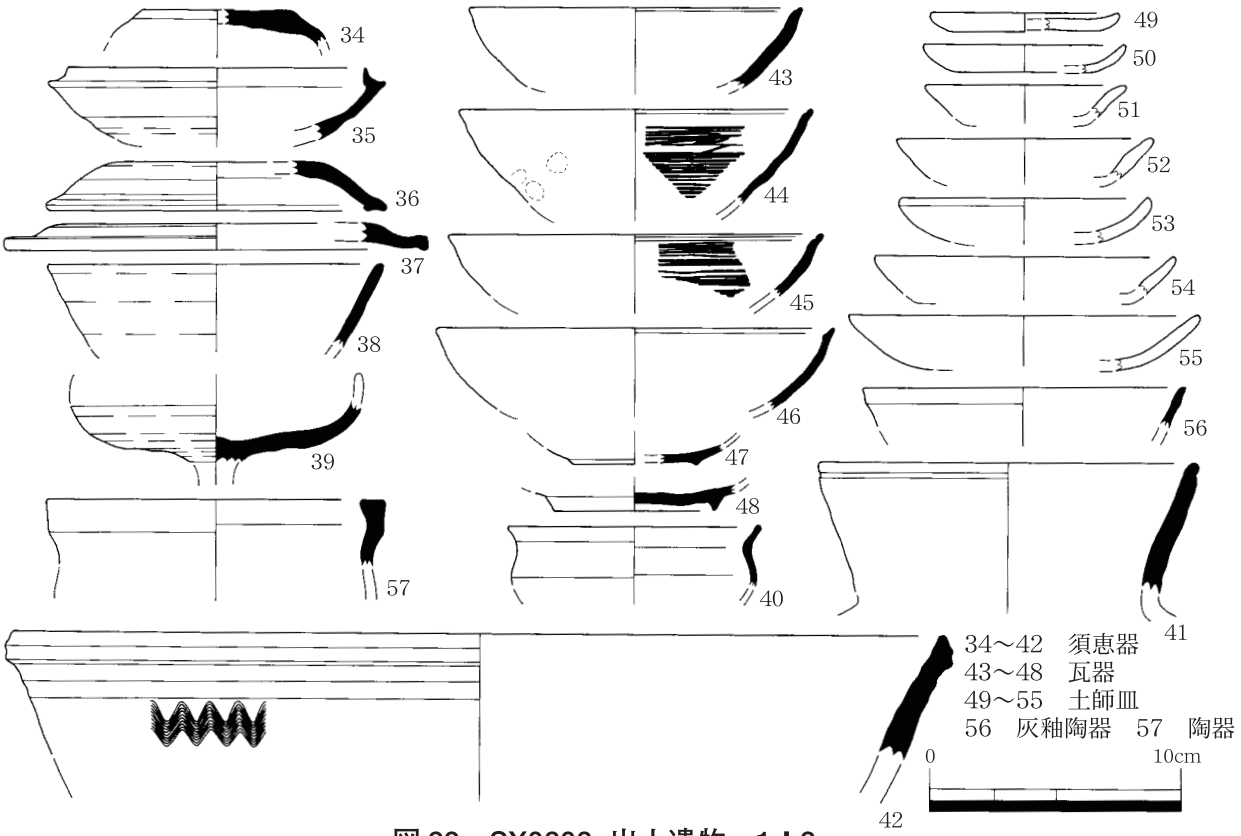


図 23　SX0203 出土遺物　1：3

小型甕（40）　口径10.0㎝。丸みのある胴部から外湾気味に口縁部が開き、口縁端部は丸くおさまる。調整は内外面ともにナデ調整。器壁が非常に薄い。胎土は精良。焼成は硬質で灰色を呈す。

短頸壺（41）　やや外反して立ち上がる口頸部をもつ。口縁端部の外側に１条の沈線がめぐっている。口頸部および口縁部の内外面はともにナデ調整で仕上げられている。口径は15.1㎝。胎土には１㎜ほどの石英や長石粒を含む。焼成は硬質で灰色を呈す。

甕（42）　口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部はわずかに上下に伸ばして稜をもつ。内外面ともにナデ調整で仕上げられているが、口縁端部から少し下がったところに波状文を施している。口径37.4㎝。胎土には細かな砂粒を含む。焼成は硬質で暗灰色を呈す。

緑釉陶器素地　椀（56）　口径12.8㎝。口縁端部がわずかに肥厚する特徴をもつ。端部は丸い。内外面ともに丁寧に磨かれている。施釉の痕跡は確認できない。１次焼成のみの素地で須恵質に焼き上げられている。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈す。

瓦器　椀（43～48）　底部から内湾して立ち上がる体部をもち、腰の張った器形をなす。口径13.0～14.0㎝のもの（43・44）と15.0～16.0㎝のもの（45・46）がある。どちらも口縁端部内側には沈線がめぐる。体部内面のミガキは細く丁寧に施されている。底部と体部の境に断面三角形の低い高台がつく（47・48）。また、48の底部内面の見込みには連続した楕円形状の暗文がみられる。器形や特徴から近江型に属し、13世紀前半の製品と考えられる。

土師皿（49～55）　すべて手づくねで成形されている。口径が7.8～8.0㎝のグループ（49～51）、10.0㎝前後のグループ（52・53）、12.0㎝以上のグループ（54・55）に分類できる。また、器高は1.0㎝以下（49）、1.0～1.5㎝（50・51）、1.5～2.0㎝（52～54）。2.0㎝以上（55）となる。体部上半と口縁部はヨコナデで調整している。体部外面下半にはユビオサエの痕跡が確認できる。口縁端部は丸くおさまるものがほとんどだが、53のみ面取り状のナデが施され、断面方形となる。色調はすべて褐色系で、Ｊタイプに属すと考えられる。14世紀後半代の製品か。

陶器 壺（57）　口縁部の破片。口径13.4㎝。口縁部が肥厚して口縁端部上面に平坦面ができる。口縁部外面も平坦面をなす。その下部から湾曲した口頸部へとつながる。表面には透明の釉薬がかけられている。胎土は精良。焼成は硬質で黄灰白色を呈す。

4. まとめ

(1) 遺構変遷

主要な遺構はすべて第1トレンチで検出した。それらを遺構の方位、出土遺物の年代観でまとめると、以下の表のようになる。

遺構名	主軸方位	出土遺物の年代
SB0117	N24°W	6世紀後半（TK43形式期）
SX0118	傾きなし	6世紀後半（TK43形式期）
SB0116	N8°E	不明
SB0121	N30°E	12～13世紀

遺構の主軸方位みると、SB0116とSB0121は北で東に振れるが、SB0117は北で西に振れる。遺構の基準となる軸が全く別であることが想定できる。第2章の北脇遺跡第12次調査の結果をみると、遺構の主軸方位はすべて北で東に振れる方位を取っており、甲賀郡統一条理も北で東へ振れる。

下川原遺跡の西半部で平成17年度に実施した第2次調査では6世紀末～8世紀にかけて50棟を越える竪穴住居が検出されたが、主軸方位に統一性はなく、時期による画一性もみられない。北脇遺跡の調査結果と合わせて考えると、北で東に振れる方位に統一されるのは9世紀以降の可能性が考えられる。

したがって、今回の調査で検出した遺構を時期別に整理すると以下のようになる。

6世紀後半　SB0117、SX0118

9世紀以降　SB0116

12～13世紀　SB0121

(2) SX0203について

第2トレンチで検出したSX0203は谷状地形である。出土遺物は6世紀代から14世紀代のものがあり、かなり時期的に幅広い。おそらく、元来から存在した谷で、長い期間に渡って存在したと考えられる。下川原遺跡の範囲を示す地形であると推測できる。

(3) 出土遺物

出土した遺物をみると、古墳時代の土器が一定量含まれている。第1トレンチの北側に隣接する丘陵には東罐子塚古墳と西罐子塚古墳があり、これらに関係する遺物である可能性もあるが、両古墳は5世紀前半の築造と考えられており、今回の調査で出土した遺物の年代とは一致しない。また、近くに泉古窯跡があるが、5世紀末の短期間の操業とされているため、こちらとも年代的に合致しない。

下川原遺跡第２次調査の成果では６世紀末～８世紀にかけての竪穴住居や掘立柱建物が多く確認され、植遺跡に後続する大規模な集落であったことが判明している。今回の調査で出土した遺物の年代はこちらの年代に近い６世紀後半である。６世紀後半は植遺跡で公的な側面をもったと推測される遺構群が形成される時期であり、この時期の遺物が下川原遺跡から一定量出土する事実は興味深い。今回検出した竪穴住居 SB0117 も６世紀後半の遺構である。これらのことから考えて、植遺跡における一つピークに合わせて下川原遺跡で集落が成立し始めた可能性を想定したい。

ただし、東・西罐子塚古墳を含めた泉古墳群は６基の古墳から構成されていたと伝えられている。しかし、現在残っているのは東・西罐子塚古墳の２基だけである。地元の方の伝聞によれば、今回の調査対象地に墳丘状のマウンドが数カ所あったという。これらの削平された古墳の遺物が今回の調査で出土した可能性もゼロではない。

これらの点については、今後さらなる検討が必要である。

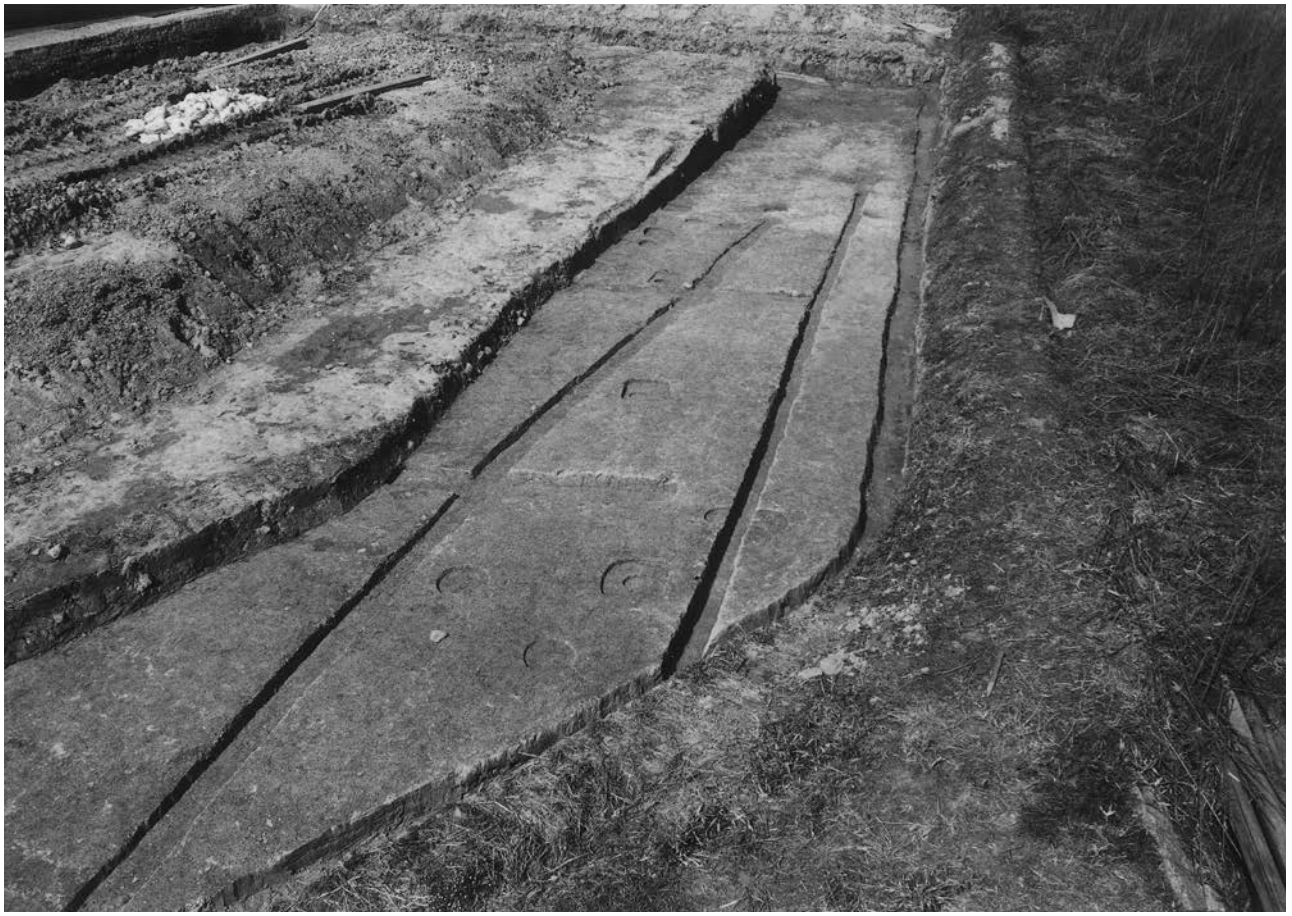
以上のように今回の調査において、調査面積が小さいながらも６世紀後半代の遺構と遺物を確認できた成果は非常に大きい。下川原遺跡での集落の成立過程と泉古墳群の姿を考える上で有益な知見を得ることができた。今後、さらに調査が進展すれば、下川原遺跡の全容が見えてくるだろう。今後の下川原遺跡の調査にも期待したい。

第１トレンチＡ区（東から）

第１トレンチＢ区（北から）

第１トレンチＣ区（北から）

第１トレンチＤ区（東から）

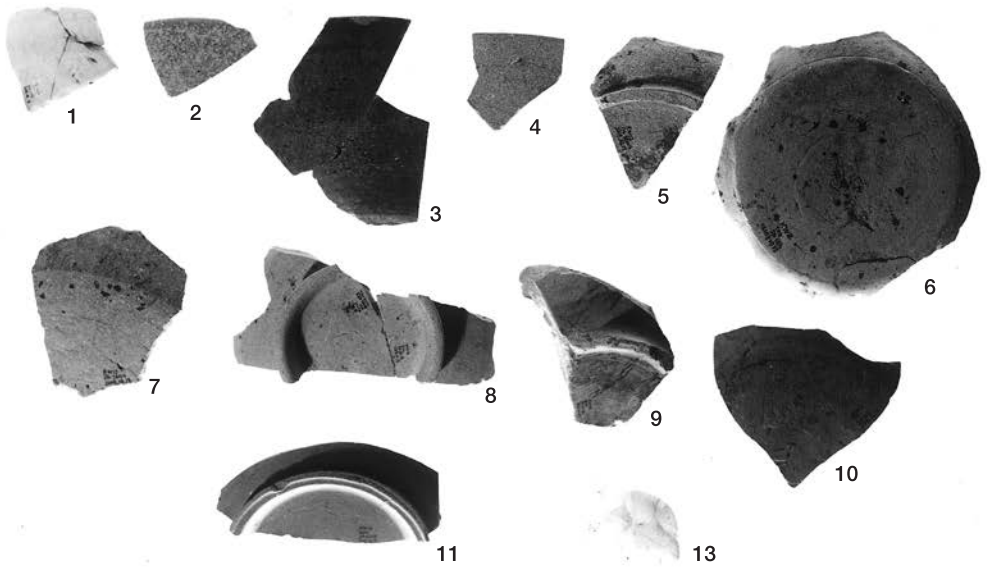


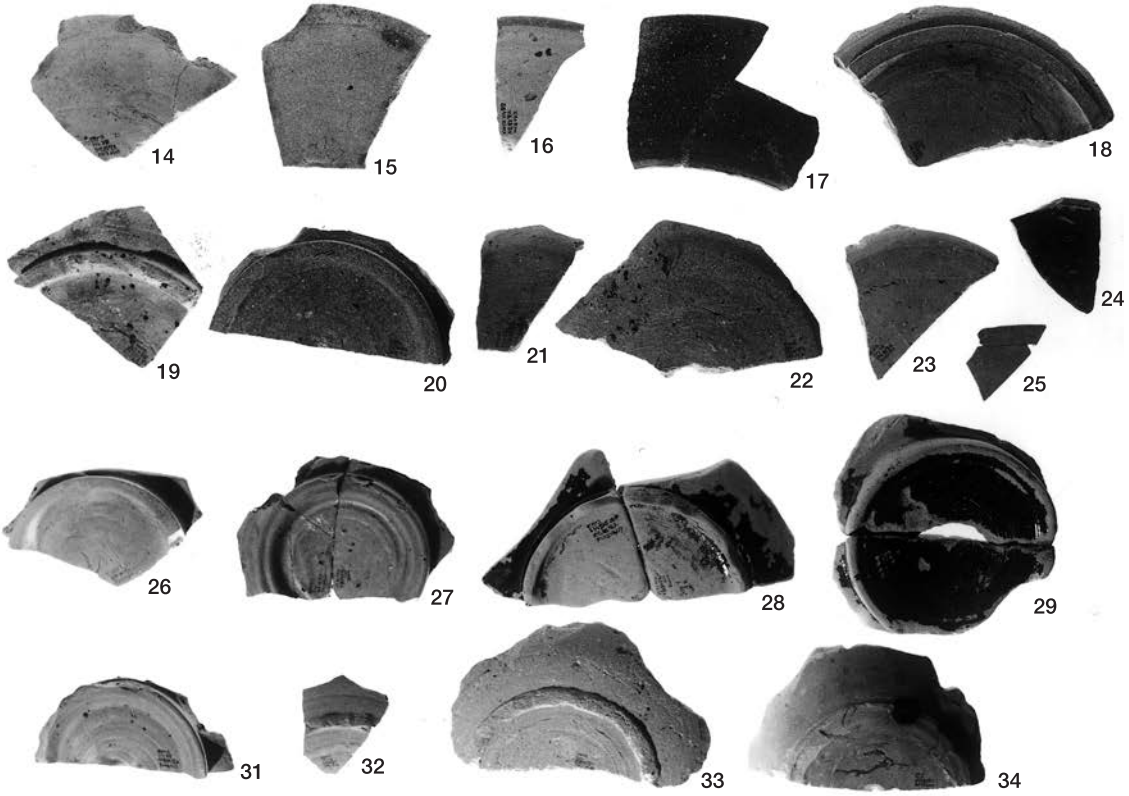
SA0124（東から）

SB0125（北から）

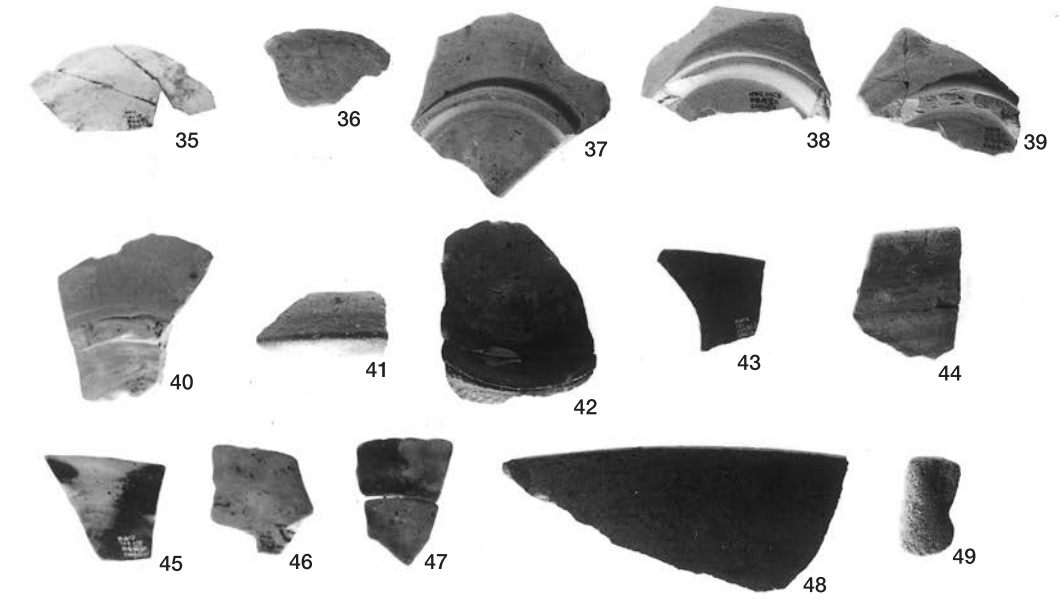
第２トレンチ全景（東から）

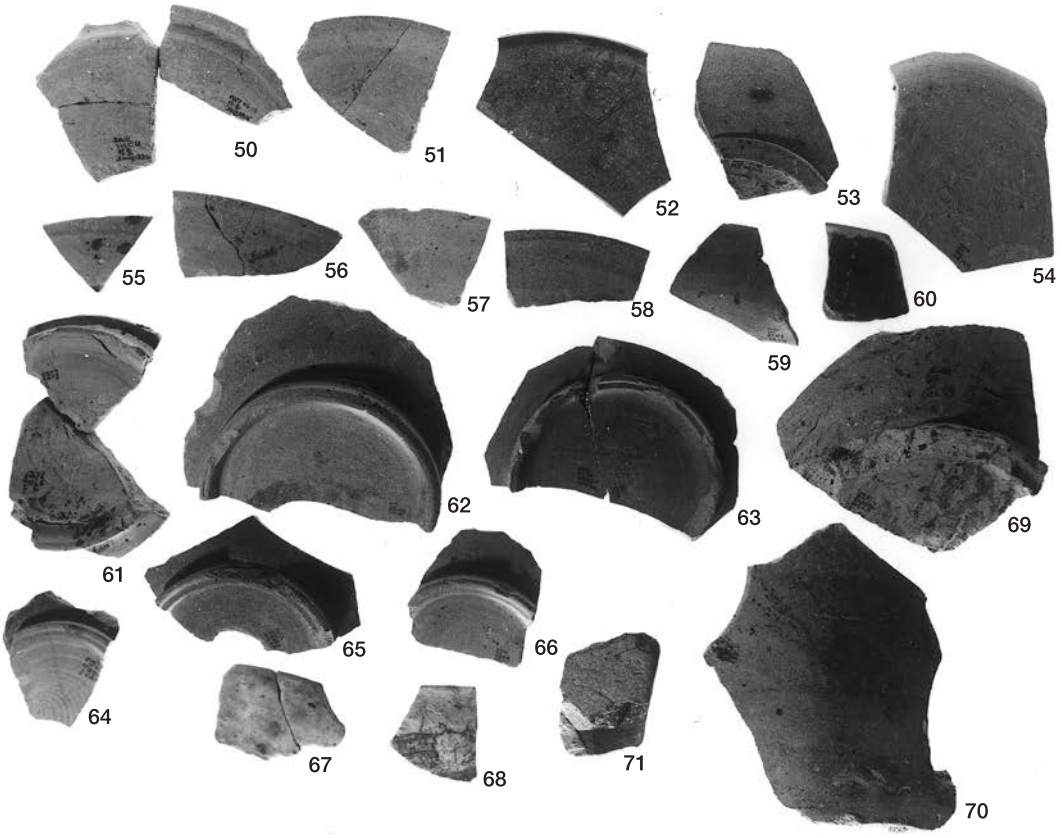
SD0213・0214（東から）





北脇遺跡第12次調査　出土遺物①





北脇遺跡第12次調査　出土土器②

下川原遺跡第 11 次　調査地全景（西から）

第 1 トレンチ全景（西から）

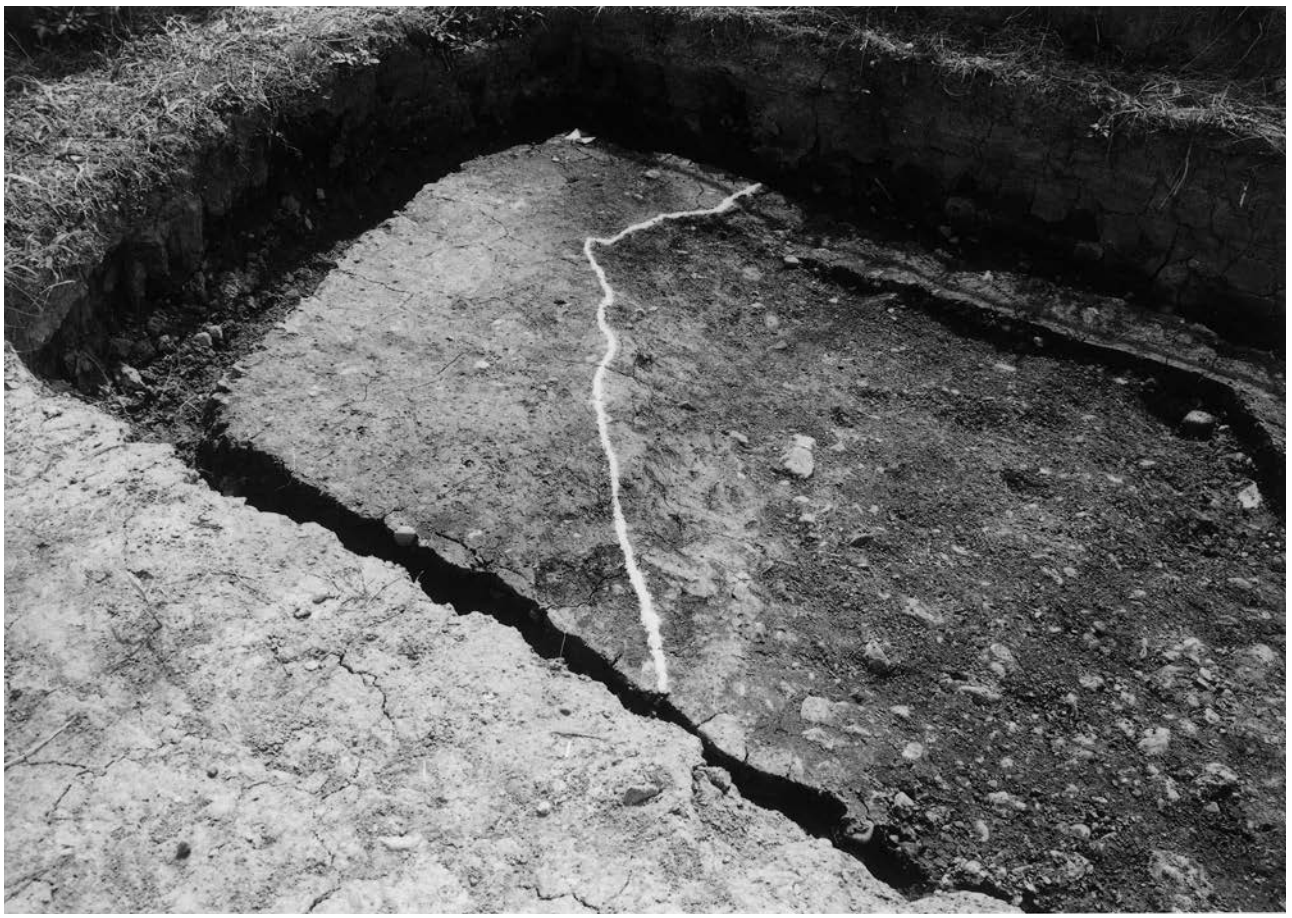
第２トレンチ全景（西から）

SB0117（北から）

SX0118（南から）

SB0116（西から）

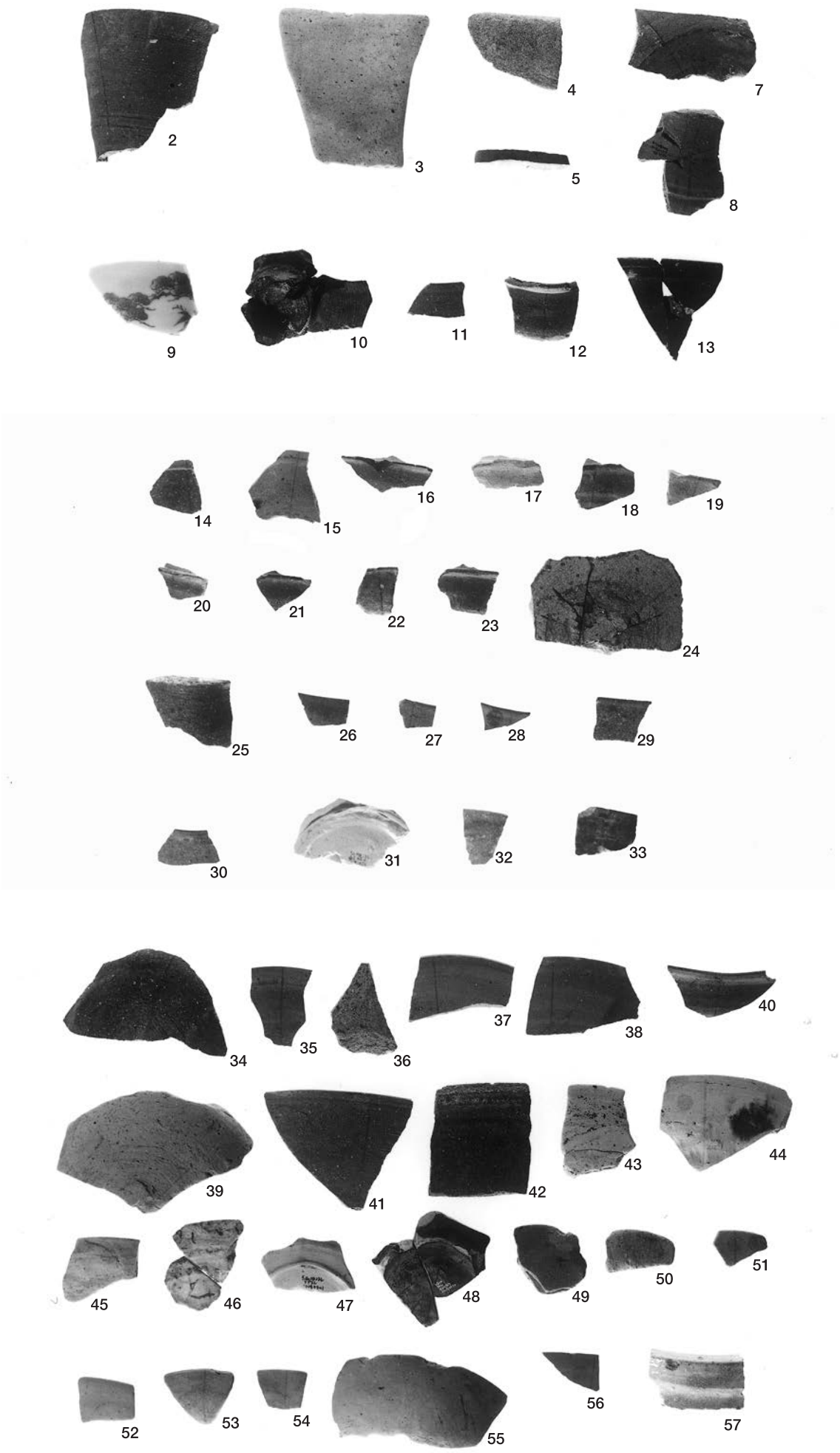
SX0121（西から）



SX0203（西から）

SX0203（北から）

SB0117 出土　土師器



下川原遺跡第10次出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きたわきいせき・しもがわらいせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	北脇遺跡・下川原遺跡　発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	甲賀市文化財報告書
シリーズ番号	第15集
編著者名	小谷徳彦
編集機関	甲賀市教育委員会
所在地	滋賀県甲賀市甲南町野田８１０番地
発行年月日	

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査面積（㎡）	調査期間	調査原因
北脇遺跡（きたわきいせき）	甲賀市水口町北脇（こうかしみなくちちょうきたわき）	25209	363-033	34°58′57″	136°9′3″	700	2008.2.4～2008.3.31 2008.9.1～2008.10.31	倉庫建設
下川原遺跡（しもがわらいせき）	甲賀市水口町泉（こうかしみなくちちょういずみ）	25209		34°59′12″	36°8′11″	700	2008.5.19～2008.8.29	駐車場など造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北脇遺跡	集落	奈良～平安	掘立柱塀、掘立柱建物、溝、土坑、ピット	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器	
下川原遺跡	集落	古墳～奈良	竪穴住居、土坑、溝、ピット	土師器、須恵器	

甲賀市文化財報告書第15集

北脇遺跡第12次・下川原遺跡第10次　発掘調査報告書

印刷・発行　２０１０年３月２６日
編集・発行　甲賀市教育委員会
滋賀県甲賀市甲南町野田810番地
ＴＥＬ　０７４８－８６－８０２６
ＦＡＸ　０７４８－８６－８２１６
印　　刷　村田印刷株式会社